

# 聖徒の道

9  
1990



末日聖徒  
イエス・キリスト  
教会

# 聖徒の道

1990年9月号



## 一般

2

大管長会メッセージ  
平和と自由を求めて  
ゴードン・B・ヒンクレー

8

明るい心  
キャサリン・クロウス・キャリントン

10

ミストーラ村—霊のオアシス  
テディー・E・ブルーアートン長老

16

キリストを中心とした教え方  
C・リチャード・チデスター

20

これは確かなことです  
—ある未亡人の証  
メーラン・エクルズ・ハーディー

28

先祖のための神殿団体参入  
—3つの成功例  
リチャード・タイス

34

聖書の地理

## 青少年

33

モルモンメッセージ  
古い友人をたずねなさい

44

どうぞキャシーを  
祝福してください  
トリーナ・ヘーゼルウッド

46

あるゴールキーパーの場合  
リーザ・A・ジョンソン

## 定期特別記事

1

読者からの便り

25

家庭訪問メッセージ  
祈りを通して主を覚える

26

質疑応答  
教会員ではない人々への召し

## こども

2

たんけん  
モラとクーナ族の生活  
ローレンス・カミンズ

4

小さなお友だちへ  
アレクサンダー・B・モリソン長老  
コーリス・クレイトン

6

分かち合いの時間  
わたしは末日聖徒イエス・キリスト  
教会の会員です  
ローレル・ロールフィンク

8

拾った人のもの  
ジャニス・W・アクロイド

11

おもちゃばこ  
タングラム・パズル  
ルース・アイマン

12

おじいちゃんはやっぱり  
おじいちゃん  
パトリシア・ニールセン

14

モルモン経物語  
約そくの地

16

証をえるにはどうしたら  
よいでしょう  
ジュリー・ワーテル

表紙の説明—ラクダに乗った隊商のシルエット。背景はエジプト・カルナクにある数ある古代神殿の壁の彫刻のひとつ。本文「聖書の地理」pp.34-43参照。(撮影ウィリアム・フロイド・ホルドマン)

## 読者からの便り

### 深い感銘を受けました

私たち夫婦はアルゼンチンで伝道しています。翻訳された大会説教を1月号の「リアホナ」(スペイン語版)で読んで深い感銘を受けました。「リアホナ」を毎月楽しみにしています。皆さんの偉大な働きに賛辞を送ります。

アルゼンチン  
ブエノスアイレス北伝道部  
クレーグ・メイフィールド長老

### 教会に再び集うようになりました

1971年、私は、まだ少年のころに家族と共にバプテスマを受けました。私たち家族はずっと活発に教会に集っていましたが、その後少しずつ教会から足が遠のいていきました。家族の中にたくさんの問題が生じるようになり、両親はついに別居してしまいました。

長い歳月を経て、私は再び教会に集い始めました。セミナーを受けていた時代の友人が私を捜し出して、活動に誘ってくれたからです。私は聖典と

教会の書物、とりわけ「リアホナ」(スペイン語版)を読み始めて、伝道に出たいという望みを育ててきました。

伝道の備えとして、私はモルモン経を読み通しました。特別な書物であるこの聖典を私は常に座右に置き、大きな助けをそこから得てきました。

現在私は専任宣教師として伝道しており、このみ業を愛しています。両親も共に教会に戻り、弟や妹たちも伝道に出る計画を立てています。依然として試しはやって来ますが、福音があればそれらに打ち勝つことができます。

私は自分の経験から、教会の若い男性全員に、「まさに今」伝道の準備を始めるようにとお勧めします。準備の最良の方法は、モルモン経と教会の書物を読むことです。伝道の召しを受けることをためらわないでください。後悔することは決してないでしょう。

アルゼンチン  
ブエノスアイレス南伝道部  
E・ホルヘ・ルイス・レオン長老

### 編集室から

愛読者の皆様にご心からお礼申し上げます。皆様からの手紙、記事、証などを募集しています。(投稿の際は住所、氏名、所属ステーク部/地方部、ワード部/支部名を記入してください)これまでいただいたお便りに感謝するとともに、今後もさらに多くのお便りをお待ちしています。□

## 聖徒の道

1990年9月号

本誌は、末日聖徒イエス・キリスト教会の公式刊行物です。本誌は以下の言語で出版されています。月刊—イタリア語、英語、オランダ語、サモア語、スウェーデン語、スペイン語、中国語、韓国語、デンマーク語、ドイツ語、トンガ語、日本語、フィンランド語、フランス語、ポルトガル語、ノルウェー語。隔月刊—インドネシア語、タイ語、タヒチ語。季刊—アイランド語。

大管長会: エズラ・タフト・ベンソン、ゴードン・B・ヒンクレー、トーマス・S・モンソン  
十二使徒定員会: ハワード・W・ハンター、ボイド・K・バックナー、マービン・J・アシュトン、L・トム・ペリー、デビッド・B・ヘイト、ジェームズ・E・ファウスト、ニール・A・マックスウェル、ラッセル・M・ネルソン、ダリン・H・オーグス、M・ラッセル・バラード、

ジョセフ・B・ワースリン、リチャード・G・スコット

顧問: レックス・D・ピネガー、ジーン・R・クック、ウィリアム・R・ブラッドフォード、フランシス・M・ギボンズ、ジェフリー・R・ホランド

編集長: レックス・D・ピネガー  
教科課程管理部実務部長: ロナルド・L・ナイトン

教会機関誌ディレクター: トーマス・L・ピーターソン

編集主幹: ブライアン・K・ケリー  
編集副主幹: デビッド・ミッチェル  
編集主幹補佐: アン・レムリン  
編集主幹補佐/こどものページ: ティエーン・ウ

チーフアートディレクター: M・マサト・カワサキ

アートディレクター: スコット・D・パン・カン

デザイナー: シェリー・クック  
制作: シドニー・N・マクドナルド、レジナルド・J・クリステンセン、ジェーン・アン・ケ

ンフ、ティモシー・シェパード

配送部長: ジョイス・ハンセン

聖徒の道 1990年9月号第34巻第9号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会

〒106 東京都港区南麻布5-10-30

電話 03-440-2351

印刷所 株式会社 精興社/クロスロード

定価 年間予約/海外予約2,200円(送料共)

半年予約 1,100円(送料共)

普通号 150円、大会号 350円

International Magazine PBMA 9009JA

Printed in Tokyo, Japan.

Copyright © 1990 by the Corporation of the President of The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. All rights reserved.

●定期購読は、「聖徒の道」予約申し込み用紙でお申し込みになるか、または現金書留か郵便振替(口座名/末日聖徒イエス・キリスト教会 振替口座番号/東京0-41512)にて管理本部長へご送金いただければ、直接郵送いたします。

●「聖徒の道」のお申し込み先…〒106 東京都港区南麻布5-10-30 管理本部長経理課 ☎ 03-440-2351 (代表) ●「聖徒の道」の配送についてのお問い合わせ…〒213 川崎市高津区溝の口131/末日聖徒イエス・キリスト教会 資料管理部 配送センター ☎ 044-811-0417

The Seito No Michi (ISSN 0365-7670) is published monthly by The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 50 East North Temple, Salt Lake City, Utah 84150. Second-class postage paid at Salt Lake City, UT 84150. Subscription price \$14.00 a year; \$1.50 per single copy. Thirty days' notice required for change of address. When ordering a change, include address label from a recent issue; changes cannot be made unless both the old address and the new are included. Send U.S.A. and Canadian subscriptions and queries to Church Magazines, 50 East North Temple Street, Salt Lake City, Utah 84150, U.S.A. Subscription information telephone number 801-240-2947.

POSTMASTER: Send address changes to Seito No Michi at 50 East North Temple Street, Salt Lake City, Utah 84150, U.S.A.



# 平和と自由を求めて

第二副管長

ゴードン・B・ヒンクレー

**私**は大分前に、南アメリカのある空港で飛行機の出発が遅れたため待っていました。そのときひとりの青年と交わした物憂い<sup>ものう</sup>会話を紹介したいと思います。

彼は髪を長く伸ばし、ひげをたくわえ、丸い大きな眼鏡<sup>めがね</sup>をかけていました。足にはサンダルを履き、服装も一般の標準からすると奇異な感じのするものでした。

しかし彼は見るからにまじめそうな青年でした。合衆国北部のある著名な大学を出て、教育もあり、物事をよく考える人でした。彼は仕事に就かず、父親から旅費をもらって南アメリカを旅行していたのでした。

人生で何を追求しているのかと尋ねると、彼はすぐさま「平和、それに自由です」と答えました。彼は幻覚剤を常用していました。平和と自由を得るための手段だということでした。幻覚剤の話から道徳の話に移っていきました。彼はいわゆる「新しい道徳」について、かつて人類が享受し得なかった大きな自由をもたらすものであると言っていたのけました。

私は自分が教会に属していることを初めに紹介しておきました。彼は、私の世代が言う道徳など、たわごとにすぎないといんぎんな態度で言いました。そして、どうやって個人の徳や道徳的な純潔を守り通せるのかと熱っぽい口調で尋ねました。そこで私は少なからずショックを与えるような話し方をしました。「君の言う自由は妄想<sup>もうそつ</sup>でしかありません。平和にしてもまやかしです。理由を説明しましょう。」

私は、この青年との会話をはじめ、これまでに聞いたことのある同様の話についてもよく考えることがあります。彼らは道徳上<sup>じょうそく</sup>の拘束からの自由を求めて、みずからを拘束し汚すような行動に走っています。これを放置していると、個人だけでなく国家の破滅をも招くことになります。

この世界を、想像を絶する  
すばらしい成長が得られる  
自由の世界とし、……平安  
の世界とすることができる  
のです。

あるとき私は事務所で若い男女の訪問を受けましたが、そのときもこの自由と平和について考えさせられました。男性は背が高く、ハンサムで見るからに男らしく、女性の方は優秀な学生で、美しく、情緒の豊かな感じのする人でした。

女性は泣きじゃくり、男性の目からも涙が流れていました。ふたりとも大学生でした。ふたりは翌週に結婚を控えていました。けれどもそれはふたりが夢見ていたような結婚ではありませんでした。ふたりは3年後、卒業してからと考えていたのでした。

今やふたりには後悔の気持ちしかありませんでした。それにふたりとも結婚の準備がまったくできていませんでした。その女性は妊娠していたのです。学業の夢も消え失せ、競争社会で生き抜くための準備もほとんどできていませんでした。ふたりはすぐにも家庭を築き、男性はとりあえず仕事を探し、家族を養っていかなければなりませんでした。

この青年は目に涙を浮かべながらこう言いました。「私たちはお互いにだまされていたのです。」

それから彼女がこう付け加えました。「いいえ、お互いに偽っていたのです。お互いと両親、それに自分自身をも偽っていたのです。道徳など偽善にほかならないという偽りの教えにだまされていたのです。罪というものは心の中の問題でしかないとする新しい道徳こそ、私たちを滅ぼすわなだったことが今やっとわかりました。」

ふたりは数週間にわたる恐れと心痛の日々の中で心を悩ましてきた数々の思いを打ち明けました。墮胎すべきだろうかという誘惑もありました。しかし、彼女はそれだけは絶対にいけないと心に決めました。たとえどんな場合でも命は神聖なものです。たとえそのような状況に置かれていたとはいえ、もし生まれてくる幼な子の命を滅ぼすようなことをしたら、彼女ははたして自尊心を持って生きていけるでしょうか。

子供を養子に出すこともできました。子供を欲しがっている家族も多く、それをあっせんするすばらしい組織も数々ありました。しかしふたりはこうした考えを打ち消しました。

たとえどのようなことになっても、青年は彼女ひとりに試練を背負わせるようなことはできませんでした。彼にも責任がありました。たとえふたりの夢がくじかれようとも、その責任を取ろうと彼は決意しました。

私は、この困難な状況にも最善を尽くそうとする彼の勇気と決意に敬意を表しました。しかし、希望を失くし、泣きじゃくるふたりを見て私の心は痛みました。まさに悲劇と悲しみに打ちひしがれた姿がそこにありました。これこそわなであり、束縛以外の何物でもありませんでした。

ふたりは自由を求めていたはずでした。悪は考え方の問題でどうにでもなると吹き込まれていました。しかしその結果、自由をなくしてしまったのです。平安もありませんでした。ふたりは自由と平安を引き換えにしたのです。すなわち、結婚したいと考える時に結婚する自由、ふたりの夢であった教育を修める自由、そして自己を大切にすることから得られる平安を失ったのです。

空港で会ったかの青年は、この話を聞いて、彼らはやり方がまずいと言うかもしれません。確かに、避妊器具を用いていれば、そのような状態は避けることができたかもしれません。

このふたりのような例は決して珍しいことではありません。それどころかその数は急増しています。

不道徳な行為の結果、悲劇を招いた人々の心に平安があるでしょうか。またその生活に自由があり得るでしょうか。

責任を取らずにただ情欲を満足させること、これ以上の偽り、不正直があるでしょうか。

私は韓国で戦争のむごいつめあとを目にしたことがあ

ります。それは軍人の父と韓国人の母の間に生まれた何千人という孤児です。この孤児は、見捨てられた不幸な子供たちです。望まれて生まれてきたわけではありません。悲惨な不道德の波間に漂う浮き草なのです。

ベトナムでも同様のことが数多くありました。気の向くままに欲望のはけ口を見つけ、情欲がもたらした悲しむべき犠牲者を見捨てる者に、平安や自由などあるはずがありません。

男性は不道德な行為を競い合い、しかもそれを得意げに吹聴する傾向があるようです。なんと下劣で愚かな競争でしょう。このような競争に勝利などあり得るはずがありません。ただそこにあるのは悲しむべき自己欺瞞だけです。征服して満足を得るのは、自己を征服したときだけです。自己を治める者は町を征服する者よりも偉大であるということわざどおりです。(箴言16:32参照)

自己修養は過去においても決して簡単なことではありませんでした。そして間違いなく、現代では一層むずかしくなっています。現代の世の中はセックスが氾濫しています。私は多くの若人が、さらには成人した人々も、周囲の言葉巧みな誘いに陥りその犠牲者となっていると考えています。この合衆国だけでも年商何兆円と言われるわいせつさを売り物にした文学、無軌道なセックスをあおり容認する低俗な映画やテレビ番組、扇情的な服装の標準、法の規制をなしくずしにする行政府の決定、愛する子供を後悔するような状況に知らず知らずのうちに追いやっている両親、などがそれです。

ある賢明な作家がこう書いています。「新しい宗教が全世界に広がりつつある。第一に礼拝すべきものは肉体であって、そのほかは一切無視する宗教である。

肉体の快楽を追求することが祭式である。……そこには何の努力も必要とされないからである。

私たちは、神聖を便宜と、……知識を求める知恵を快楽を求める喜びと、伝統を流行と、引き換えにしてしま

ったのである。」(アブラハム・ヘシエル「自由の危機」p.200)

多くの大衆娯楽で裸が容認されています。さらには、サディズムの領域にまで及んでいます。

ポルノという風をまいて、崩壊というつむじ風を刈り取っているとしか言いようがありません。(ホセア8:7参照)

私たちはもっと歴史を勉強する必要があります。数々の国家や文明が栄華を極め、そして死に絶えています。それはみずからの道徳的な病が原因でした。

花は芽の状態に大きく左右されます。青少年期は、将来家族としての花を咲かすために種をまく時期です。いかなる国家も、いかなる文明も、その人民の家庭に力が必要なければ存続することはできません。この力は、家庭を築く人々の高潔さから生まれるものです。

いかなる家族も、いかなる家庭も、道徳と誠実と相互の尊敬という基盤の上に立たなければ、平和を得、逆境の嵐から免れることはできません。信頼のないところに平和はなく、誠実のないところに自由はあり得ないので

す。無分別な性から平安と愛と喜びを求めることは、むなししい夢にすぎません。不道德の中に自由を見いだそうとすることも同様です。救い主は言われました。「すべて罪を犯す者は罪の奴隷である。」(ヨハネ8:34)

主の予言者であるエズラ・タフト・ベンソン大管長は、この問題について次のように明言しています。

「モルモン経には終わりの日の悪魔の策略に関する警告があります。『またほかの人々をなだめ、この人々をすかして肉欲をほしいままにさせるから、その人々は「シオンの中では万事よろしい。シオンは栄えて実に何事もみなよろしい」と言う。このように悪魔はこの人々をだまし、心を配って地獄へつれて行くのである。』(II ニーファイ28:21)



いかなる家族も、いかなる家庭も、道徳と誠実と相互の尊敬という基盤の上に立たなければ、平和を得、逆境の嵐から免れることはできません。

モルモン経の中には『目を覚せ』と呼びかけている箇所が幾つもあります。その一例を読みます。『願わくはお前たちが目を覚して、まことに地獄の熟睡から目覚め〔るように。〕……目を覚せ。そして義のよろいを着よ。お前たちを縛っている鎖をふり切りかくれた暗い境遇から出てちりあくたから立ち上れ。』(II ニーフアイ 1 : 13, 23)……

今の世にはびこっている罪として、性的な罪悪があります。予言者ジョセフは、イスラエルの長老たちはほかのいかなる人々よりも、多くの誘惑、攻撃、困難に遭うであろうと言っています。(『説教集』8 : 55参照)

ジョセフ・F・スミス大管長は、性的な罪を、教会に脅威をもたらす3つの危機のひとつとしてあげていますが、確かにそのとおりです。(『福音の教義』p.302参照) 今日社会は、性的な罪で汚しつくされています。(『器の内側を清める』「聖徒の道」1986年7月号, pp.4-5)

徳を守るとは本当に確かな道なのでしょうか。後悔から自由へと人を導く道はほかにありません。徳の道を歩むことによってもたらされる良心の安らぎこそ、唯一の偽りのない平安なのです。

とりわけ、これは徳の道を歩む人々に神から与えられた確たる約束です。ナザレのイエスは山上から宣言しておられます。「心の清い人たちは、さいわいである、彼らは神を見るであろう。」(マタイ5 : 8) これは、それを成就する力を持っておられる方ご自身が交わされた誓約です。

現代の啓示も、簡潔な戒めの後に、ほかに比べ得るものがないすばらしい約束を宣言しています。

「絶えず徳<sup>もつ</sup>を以て<sup>なんじ</sup>汝の<sup>おもい</sup>想を飾るべし。」そしてこれが約束です。「然<sup>しか</sup>る時は、汝の<sup>みづか</sup>自ら信ずること神の前に強くなりて、……聖霊は常に<sup>とも</sup>汝の伴侶となり、……汝の支配は永遠の支配となりて強いらるることなく永遠に汝に流れ込まん。」(教義と聖約121 : 45-46)

神は様々な約束を私たちに与えてくださいましたが、絶えず徳をもって思いを飾る人々に与えられたこの約束ほどすばらしいものは、ほかにないのではないのでしょうか。

私は断言します。この世界を、想像を絶するすばらしい成長が得られる自由の世界とし、汚れない良心と愛、誠実、確かな信頼と忠誠のもたらす平安の世界とすることができのです。

これは、世の人々には見果てぬ夢のように思えるかもしれませぬ。しかしこの教会の会員には必ずできます。個人の徳によって世の中はより豊かに、より強くなるのです。

願わくは皆さんの上に神の祝福があって、この自由を実現し、この平安を知り、この祝福を得ることができますように。私は主の僕<sup>しもべ</sup>として、皆さんが徳をまくならば、現在と将来にわたって喜びを刈り取ることを約束します。

□

#### ホームティーチャーへの提案

1. ヒンクレー副管長は、道徳的な自制を無視して自由と平安を求めるといふ過ちを犯している人が数多くいると指摘している。しかしそのような思いや行ないは、自分自身を悲しみのとりこにするだけである。
2. 良心の安らぎこそ、私たちが得ることのできる真実の平安である。
3. 徳と互いに敬い合う精神は、悲しみを抜け出して自由へ続く道に私たちを導く。
4. 引用されている聖句や物語の中に、家族が朗読したり話し合ったりするのに適したものはないだろうか。

# 明るい心

キャサリン・クロウス・キャリントン

むし暑くて心地の悪い日でした。暑さのために私はぐったりして、いらいらしていました。私の仕事はスーパーマーケットのレジ係です。夕方になり、時計を見ると、もう仕事に就く時間です。冷房のきいた店内に入っても、なぜか不快感は収まりません。あと10分だわ、と私は思いました。仕事を始める準備をしなくては。

考え込んでいると、スピーカーから店の支配人の声が聞こえてきました。「キャサリン、控え室まで来てください。」

店の正面入り口へ行こうとしたとき、ひとりの客に、小麦粉はどこにあるかと聞かれました。私はほほえんで、右側の方を指しましたが、不機嫌な気持ちには変わりありませんでした。あと5分、時間が必要でした。ふだんは客に接したり、話したりするのが好きでした。気分のいい日には、それもまた仕事の楽しみのひとつだったのです。ところが、きょうは長い一日になりそうでした。

控え室でレジに入れるお金を受け取り、確認しました。きょうの割り当ては、8品目以下の買い物客専用の急行レジの方です。

まあ、嫌だ。私はそこが嫌いだったのです。必ず規定以上の品物を買う人や、小切手を書くのに手間取る人がいるからです。今夜はひどい晩になりそうだわ。私は憂ううでした。

きょうはとでもほほえんでなんていられない、という思いで頭がいっぱいになりました。私はこれまで何年間も接客の仕事をしてきましたが、いつも笑顔であいさつするよう心がけていました。たとえ、そんな気持ちになれないときにさえも。このような仕事をする人は、女優のように振る舞わなくてはならないのです。

時間がたち、客の応対に追われているうちに、いくらか気分がよくなってきました。この調子なら、何とか乗り切れる。そう思ったところに、年老いたスミスさんがゆっくりとした足取りでやって来ました。「こんにちは、スミスさん。お元気ですか。」私は何とか愛想よく言うことができました。彼にほほえみかけ、誠実な態度を示すことも何とかできたのです。老人は私の質問に答えながら、後ろのポケットから手探りで財布を取り出しました。私は彼が買った品物の値段をレジに打ち込みました。

早くしてくれないかしら、と私は思いました。これで

は時間がかかって仕方がありません。「奥さんが早くお元気になるといいですね。」そう言いながらも、列がだんだん長くなっていくのが気になりました。老人は少し震える手つきで小切手帳を取り出しました。まあ、小切手。彼は私に書いてくれないかと頼みました。「いいですとも。」私はできるだけ愛想よく答えました。急いで小切手を書くと、老人は、今度は身分証明書を出すために、財布の中を捜し始めました。

うんざりした様子を顔に出してはいけないと自分に言い聞かせました。やっと、老人は証明書を捜し出し、私は必要事項を小切手に書き写しました。「ありがとうございました。またお越しく下さい。」そう言うと、老人は笑顔で、「どうもお世話さま」と言いながら、立ち去って行きました。

後ろで待っていた人たちは、あの老人のために待たされたことを何と思ったでしょう。「こんにちは」と言って次の人が進み出ました。私はスミス氏が遠くへ行ってしまったことを確かめてから言いました。「お待たせしてすみません。」

すると、その人は笑いながらこのように言いました。「私だって、あのくらいの年になったら、あなたの助けを借りなきゃなりませんよ。」

その答えを聞いて、私の思いは一変してしまいました。なんとすばらしい教訓でしょう。私がそれまで自分の感情を抑え、ほほえみを絶やさないようにしてきたのは、愛と思いやりの気持ちからではなく、給料をもらっているからという義務感からでした。けれどもこの男性は、心から他人の欠点や弱点を忍耐したいと望んでいたのです。彼の態度は、列の後ろに並んでいた人たちにも大きな影響を与えました。いらいらした足踏みとそわそわした態度は、ほほえみと忍耐に変わったのです。

いら立ち、疲れ、我慢できなくなったときには、ちょっと心を落ち着け、自分はどのように他人に接してほしいかを考えてみてください。そうすれば、明るい気持ちになります。そして、自分もそのように他人に接することができるのです。□

\*キャサリン・クロウス・キャリントン姉妹：ユタ州ケイビルステーク部ケイビル第10ワード部所属。





# ミストーラ村 — 霊のオアシス

七十人第一定員会会員  
テディー・E・ブルーアートン長老

パラグアイの未開地域に、ミストーラと呼ばれる小さな村があります。この住人はすべて末日聖徒イエス・キリスト教会の会員です。首都アスンシオンにあるパラグアイの教会の管理本部からは遠く離れていますが、南米のインディアンを先祖に持つこの謙遜な人々は、回復された福音の原則とプログラムに従順に従い、世に対する信仰の模範となっています。

ミストーラ村の起源は1977年にさかのぼります。当時、パラグアイ伝道部の伝道部長であったマール・ベア兄弟は、アスンシオンのテレビ番組に出演して、パラグアイのチャコの荒地から来たウォルター・フロレスというひとりの男性に会いました。ベア伝道部長はその男性を見て、彼に福音を伝えるべきだという靈感を受けました。1980年に宣教師がフロレス兄弟のもとへ送られました。彼は福音のメッセージに深く心を打たれ、間もなくバプテスマを受けました。フロレス兄弟の証はとても強くはっきりとしたもので、彼は、友人や親戚であるほかのインディアンたちにも自分が福音を伝えなければならないことを知っていました。こうして何百という人々が教会に加わったのです。

214人のニバクレー族(旧称チュールピ族)の聖徒は、この世の影響に束縛されない自由を望んで、パラグアイの人里離れた無人の広い荒地に移住しました。彼らはその居留地を「ミストーラ」と名付けました。当初、彼らは菜園や狩りや漁によるまったくの自給

自足の生活をして、外界との交流はほとんどありませんでした。

しかし、ミストーラ村とアルゼンチンの北の国境の間を流れる湿地性のピルコマヨ川が、自給自足の生活と信仰に対する試しになりました。

ある年、アンデス山脈の雪解け水でピルコマヨ川が増水して土手を越え、ミストーラ村は洪水になりました。聖徒たちはやむなくその土地を離れ、川岸から10キロ離れた場所へ移動しました。しかし、そこも安全ではありませんでした。再び別の大規模な洪水に覆われ、1カ月の間、ひざまである水が引きませんでした。村人は自分たちの手で建てた美しい礼拝堂を失い、家も畑も衣料品も、持ち物のほとんどすべてを失ってしまったのです。それでも彼らは信仰を失いませんでした。

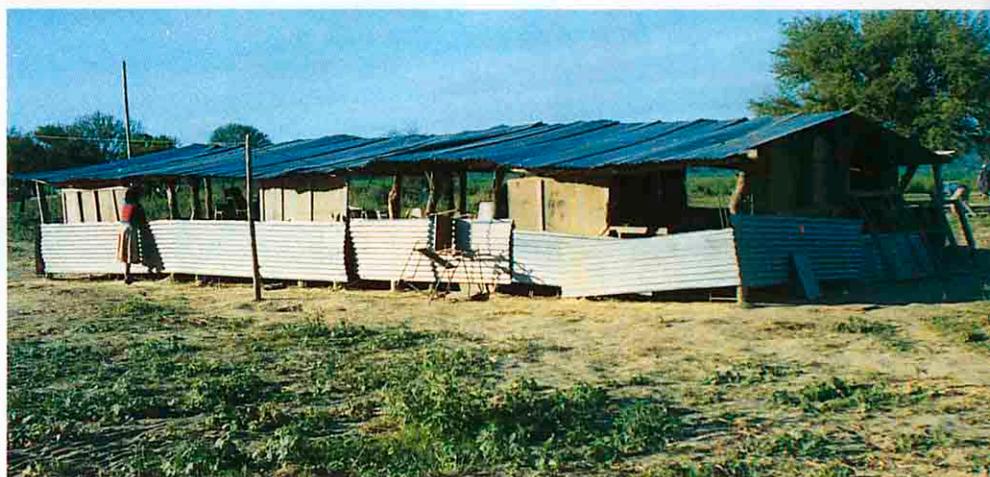
1987年6月5日、アルゼンチンのブエノスアイレスに駐在する地域会長会の一員として私はアスンシオンへ飛び、パラグアイ・アスンシオン伝道部のジョン・J・ウェットン伝道部長に会いました。私たちは、ほかの2、3人の兄弟たちと共に2台の小型トラックに、足踏み式ミシン、シャツやドレスを作るための布、米、豆、塩、ほかにいくつかの必需品を詰め込みました。最近ニバクレー語に翻訳された「福音の原則」も1冊、持って行きました。(ニバクレー族のインディアンたちはパラグアイで広く使われているスペイン語やグアラニー語を話さず、独自の言語があります)

私たちはアスンシオンからフィラデ



左 ミストーラ支部のアレナス支部長。妻や子供たちと共に。

上 ミストーラ村までの2日がかりの旅には四輪駆動の車が必要だ。舗装道路を通り、次に舗装されていない道に行く。最後に深いわだちを残したデコボコ道に入る。



ルフィアまで、約480キロの旅をしました。整備された走りやすい道路を車で7時間の道のりでした。翌日は、ミストーラ村を目指して250キロの道程を、時速ほぼ15キロから25キロのスピードでわたちの多いほこりっばい道を走りました。そのうえ、そぼ降る雨で道がぬかるみ、居留地にたどり着くのは容易ではありませんでした。距離的には短いとはいえ、この道を行くだけでも、9時間近くかかりました。

ミストーラ村に到着すると、私たちはおもに女性と子供たちの温かい歓迎を受けました。私がほかの男性はどこにいるのか尋ねると、狩りに行ったという返事です。何を取りにいったのかを聞くと、「何でも取ってきます」と姉妹たちは答えました。(魚を取るために往復20キロを川まで歩いて行く男性もいました)居留地に残っていた家畜は羊が3匹とやぎが2匹、にわとりが数羽にやせた犬が1匹だけでした。衣類や栄養のある食糧は洪水のためにほとんど残っていなかったため、聖徒たちは南半球のこの地では真冬に当たる6月の摂氏20度の気候の中で、寒さで身を震わせていました。夜間、摂氏5度から0度にまで下がる寒気の中では、葦あしと角材だけで建てた間に合わせの家で寒さをしのぐことはできませんでした。とはいえ6月以外はほとんど猛暑が続き、摂氏48度を超える日も少なくありません。

しかし、何か月にもわたるこのようなあらゆる艱難かんなんの中にあっても、ミストーラ村の聖徒たちは一言も不平をも

らしませんでした。悲しい顔をした人はひとりもいません。そこにあるのは笑顔だけでした。

その日、村人たちは午後の食事のために羊を1匹料理しましょうと言ってくれたので、私たちは丁重に辞退しました。それでも彼らはぜひにと勧めてくれました。私たちは肉には少しだけしか手をつけませんでした。残りは彼らが利用することを知っていたからです。

私はミストーラ支部の若い支部長にこう尋ねました。「会員の中に病気の人はいませんか。」(この地域の人々は皆、若くして亡くなります。統計によれば、100人のニバクレー族の中で長命を保つのは11人程度です。残りの人々は病気で亡くなるのです)支部長は私を見て、しばらく考えてからこう言いました。「いないと思いますが、ほかの兄弟たちにも聞いてみましょう。」2、3分後、ふたりの兄弟と言葉を交わしてから、支部長は次のように言いました。「『もちろん病人はひとりもいません』と兄弟たちは話しています。」そして、簡単な説明を付け加えました。「私たちの中にはメルケゼデク神権者は39人います。私たちは見回って、人々を祝福しているんです。」

私は次のような質問をしました。

「お休み会員はいませんか。」

「ブルーアートン長老、もちろんいません。私たちはバプテスマを受けて、主を受け入れたのです。皆、真の聖徒で、熱心に主を礼拝しています。」支部長はそう答えました。



左 老いも若きも、ミストーラ村の聖徒たちは福音の原則を基として生活している。

左下 日干しれんが造りの最初の建物が洪水に流された後、ミストーラ村の聖徒たちはこの仮の礼拝堂を建てた。

上 ピルコマヨ川の氾濫で村が洪水に襲われた後、真冬の凍るような夜つゆをわずかでもしのぐために、こうした間に合わせの住居が作られた。



上 ドロシー・ブルーアートン姉妹が手にしているのは、樹皮を染めて作ったバッグである。ミストーラ村の聖徒たちは什分の一を納めるためにこれを作って売った。

下 ミストーラ村の将来は教会とセミナーに活発に集う青少年たちに託されている。

右 相次ぐ洪水のため栄養のある食糧はほとんどなかったにもかかわらず、ミストーラ村の聖徒は健康に恵まれていた。

私は支部長に、夜の集会のために祈ってくれる人を何人か探すように頼みました。ある姉妹が、まるで個人の祈りを捧げるかのように、こう主に祈りました。「天のお父様、私たちはあの美しい教会堂を失いました。洋服も失いました。もう住む家もありません。食べる物もありません。何を建てるにも材料さえありませんし、濁った川の水を飲みに行くにも10キロも歩かねばなりません。私たちはバケツさえ持っていないのです。でも、私たちは主に感謝したいと思っています。私たちに与えられたすばらしい健康、幸福、そして私たちがこの教会の会員になれたことに感謝しています。天のお父様、私たちはお父様に知っていただきたいと思ひます。私たちはどのような環境の中にあっても、バプテスマのときに交わした誓約を堅く、心から忠実に守りたいと願っています。」

私たち訪問者はミストーラ村に住む会員たちの信仰の模範に、とても謙遜な気持ちにさせられました。集会の中で、私たちは彼らの住む土地を奉献しました。私たちは家族ごとの敷地や、雨が降ったときに作物を植える予定の土地を見て歩きました。

ブエノスアイレスに戻ってしばらくしてから、私は、ミストーラ村には期待した雨は降らなかったものの、信仰ある聖徒たちがとりあえず作物を植えてみたところ、洪水のために地中深くに残っていた水分のおかげで作物が生長したという知らせを受けました。結

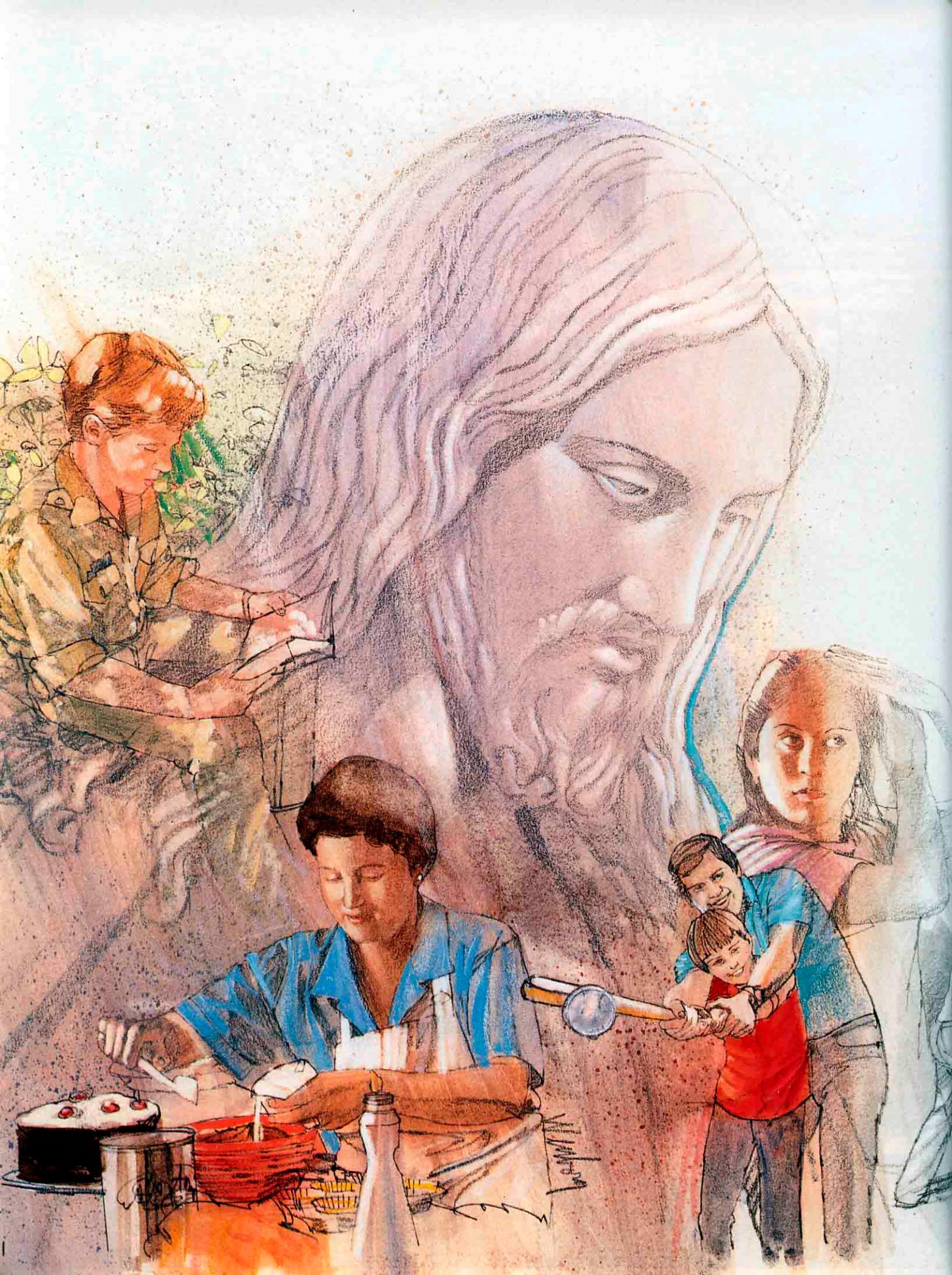
局その後、何度かにわたって雨が降り、彼らはさらに豊かな収穫に恵まれたのです。

1988年には、例年の2倍以上の積雪があっただけに、アンデス山脈の雪解けが始まったときはミストーラ村の聖徒たちのことが心配になりました。ピルコマヨ川が再び氾濫する恐れがあったからです。しかし私は、ミストーラ村の聖徒たちが次のように言ったという報告を受けました。「心配しないでください、今年は大丈夫です。この土地は奉献されていますから。」川は2度まで増水による氾濫を繰り返しましたが、洪水はミストーラ村には達せず引いてしまいました。

この善良な人々の信仰は什分の一を納めたいという切なる願いの中にも表われています。お金もなく、そのほかのものも乏しい中で、村人たちは樹皮を利用して繊維を紡ぎ、それでショルダーバッグやハンドバッグを作りました。このバッグ類を染めて、私たちに売りました。什分の一を納める現金を得るためです。

私は当時、この忠実な教会員たちの模範に驚嘆しました。そして今でも驚嘆しています。なんというこの世の光でしょう。彼らの持つこのあつい信仰は、回復された福音に対する熱烈な証から来ているのです。天父は、ミストーラ村の聖徒たちが持っている信仰と福音への愛にこたえて、これからも変わることなく祝福を与えてくださるでしょう。□





# キリストを中心とした教え方

○・リチャード・チデスター

**何**年前か、私の友人が教会教育部に就職するためにジョセフ・フィールディング・スミス長老と面接をしました。「あなたは何を教えるつもりですか。」スミス長老がこう尋ねたので、友人はいくつかの大切な福音の原則を列挙しました。すると、スミス長老は愛に満ちたまなごしを友人に注ぎ、真剣な面持ちでこう言われたのです。「あなたはイエス・キリスト、しかも十字架につけられたキリストを教えるのです。」

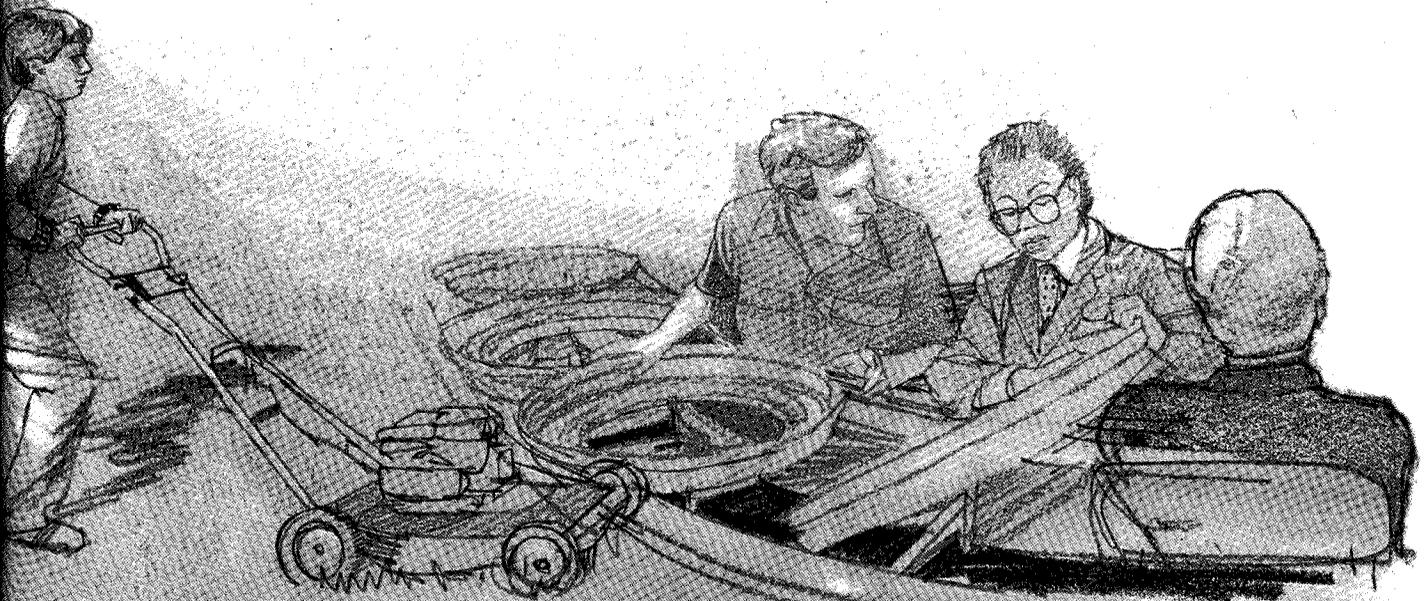
スミス長老のこの助言はすべての教会員に適用できます。私たちが教え実行することは、それが教会の正規の召しであれ個人的な模範であれ、キリストとキリストの贖罪が生活の中心にあることを示すものでなければなりません。

予言者ジョセフ・スミスは次のように述べました。「教会の基本原則は、イエス・キリストが死んで葬られ、3日目によみがえって天に昇られたという、使徒と予言者の証である。私たちの宗教のそのほかすべては、それに付随するのみである。」（「予言者ジョセフ・スミスの教え」p.121）

主イエス・キリストは世の光であり、世の命です。（IIIネーファイ11：11参照）イエス・キリストに対する信仰は、福音に一貫性をもたらす原則です。私たちが教えることはすべて、ちょうどぶどうの枝がつるにつながっているように、キリストに結びついていなければなりません。救い主はこう言われました。「わたしにつながっていきなさい。そうすれば、わたしはあなたがたとつながっていよう。枝がぶどうの木につながっていなければ、自分だけでは実を結ぶことができないように、あなたがたもわたしにつながっていなければ実を結ぶことができない。

わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。もし人がわたしにつながっており、またわたしがその人とつながっておれば、その人は実を豊かに結ぶようになる。わたしから離れては、あなたがたは何一つできないからである。」（ヨハネ15：4-5）

キリストを中心として教えるには、イエスについて教えるという自覚を持ってレッスンに取り組む必要があります。



このたとえの中で、主は霊的な命の唯一の源です。主は、ご自分に従う人々に命と力をもたらす唯一の泉なのです。ぶどうのつるからあらゆる枝に養分が送られるように、キリストはご自分に信頼を置くすべての人々に霊の命を授けるお方なのです。

キリストは人と御父との仲保者です。主はご自分を「道であり、真理であり、命である」と言われ、「だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない」(ヨハネ14:6)と断言されました。

キリストは、人に霊の命、つまり永遠の生命を与えてくださったので、私たちの救いの父とも言えます。福音の真髄は主イエス・キリストの贖罪と復活にあります。主はニーファイ人にみ姿を現わされたとき、この点を強調されました。「われはすでにわが福音を汝らに授けたるが、その福音を言い換うれば次のごとし。まずわが父われをつかわしたまいれば、われは父のみこころを行わんとてこの世に来れり。

わが父のわれをつかわしたまいしは、われが十字架にかけられて、後にあらゆる人々をわれに引きよせんがためなり。また人がわれを十字架に上げたる故に、今度は御父が世の中の人を必ずひき上げて、これを各々の行いの善悪に応じて裁判するためにわが前に立たせたまう。」(III ニーファイ27:13-14)

以上の聖句から、スミス長老がなぜキリスト、しかも十字架につけられたキリストを教えるように言われたのかがわかります。福音のどの原則をとってもイエスの無限の贖罪なくして効力を生じるものはなく、教会はそうした福音の原則と儀式をもたらす経路になっているのです。

多くの場合、レッスンをイエスに関連づけて教える責任は、教師である私たちにゆだねられています。たとえば従順の原則を教えるときに、次のように説明することもできます。私たちが従うのは、主が私たちを愛してくださり、私たちのためになることだけを主は要求される

からです。つまり、私たちは主を愛し、主が要求されることはすべて私たちの幸福につながるという信頼を置いているので、従う必要があるのです。キリストが単に従順を命じられたからではなく、従順によって私たちは主に近づき、一層主に似た者となれるからこそ従うのです。

断食の律法を教えるときにも、従順と同じように、断食と祈りの目的は私たちを主に近づける点にある、と教えることができるでしょう。断食をすると食物や水が無性に欲しくなります。空腹のつらさは、それと同じように主と主の義を渴望する必要があることを私たちに思い起こさせてくれます。断食とは主のみたまと力を渴望することなのです。断食し、祈り、聖餐を取り、証を述べることによって主のみたまを受けるとき、私たちの行なう断食は「悲しみから喜びへと」変わります。

レッスンの中で、バプテスマとは私たちが実り多い人生を送り永遠の生命を享受できるように、まことのぶどうの木であるキリストに「つぎ木」されることだと教えることもできるでしょう。バプテスマを受けることにより、私たちは終わりまで仕える(モロナイ6:3参照)ことを主に誓約し、キリストのみ名を自分の身に引き受けるのです。また、新たに生まれるときには、キリストのみ姿を自分の身に刻んでおきたい(アルマ5:19参照)と願うのです。

家族の歴史活動も、来世で家族と共に住むことだけが強調されて、キリストの家族の一部として永遠に住めることが教えられなければ、キリストの体から遊離したものになりかねません。

知恵の言葉や純潔の律法も、もしも肉体的な健康面の利益だけが強調されるなら、ぶどうの木から切り取られてしまうかもしれません。しかし、肉体は主の宮居であり主のみたまが宿るところであると教えるなら、純潔の律法と知恵の言葉は、より深い意味を持つようになります。

什分の一も、それが規則だから納めるとか祝福を受け

The Standard Works  
Bible  
Book of Mormon  
Doctrine and Covenants  
Pearl of Great Price



るために納めるというのでは、ぶどうの木から折り取られてしまうかもしれません。什分の一は、生命も時間も富も、私たちの持てるすべてが主のものであることを教えています。私たちは主の教会を支えると同時に、信仰を働かせて主から受けたものの幾分かを差し出すように求められています。什分の一を、主に対する私たちの信仰と感謝と愛の表われであると考えれば、その霊的な意味はより明らかになるでしょう。

愛はもしそれが、何らかの行ないや、意志の力で態度を変えることにより得られると教えるなら、その意味を失いかねません。愛つまり仁愛は、キリストがご自分に真に従う者たちに与えられるみたまの賜であることを強調しなければなりません。(モロナイ7:48参照) 純粋な愛は、幼な子のようにみずからへりくだり、救い主に自分の意志を従わせ、従順、断食、祈りを通してみたまの導きと賜を求めるときにだけ、与えられます。神の愛を胸に満たすことの大切さは、モルモン経の中で繰り返し強調されています。

キリストを中心として教えるには、イエスについて教えるという自覚を持ってレッスンに取り組む必要があります。これは必ずしも、ある箇所を適切に強調したり特別な技術を用いたりすることだけを意味しているのでは

ありません。みたまの力と調和する必要があるということなのです。事実、私たちはみたまによって教えなければならず、そうでない場合は教えるはならないという、主の戒めを受けています。(教義と聖約42:14参照)

私は次のようなことを学びました。つまり、みたまを受けて教える最良の方法は、あらゆる真理と力の源であり、福音のすべての原則の中心であるキリストについて教えることです。これは、「いついかなる時でも、どのような所に居ても、どんなことについても、……神の証し人にな……る」(モーサヤ18:9)というバプテスマのときに交わした誓約を忠実に実行することを意味します。

私たちが救い主をレッスンの中に取り入れる前に、私たち自身が主のみたまを取り入れる必要があることは、言うまでもありません。ベンジャミン王は、自分とキリストとの関係をどう考えればよいのか教えてくれています。

「よく言うておく。お前たち〔は〕……全身全霊の力をつくして感謝と讚美とを捧げ、お前たちを造りお前たちを助けてお前たちを養い、お前たちを守りお前たちを喜ばせお前たちが互いに平和に暮すことを許したもうた神をたたえ〔るべきである。〕」(モーサヤ2:20)

福音の教師である私たちがイエスを中心としたレッスンを行なうなら、ニーファイが語ったように、ニーファイとその同僚である福音の教師たちがしたことを私たちも自然と行なうようになるでしょう。

「私たちはキリストのことを話し、キリストのことを喜び、キリストのことを説教し、キリストのことを予言し、また私たちの子孫にどこに罪の赦しを求めぬかを知らせるために自分たちが予言したことも書くのである。」(II ニーファイ25:26)□

\* C・リチャード・チデスター兄弟：ユタ大学教会教育部副部長。ユタ州バウンテフル・ハイツステーキ部バウンテフル第16ワード部所属。

# これは確かなことです

## ——ある未亡人の証

メーラン・エクルズ・ハーディー

家族旅行の最中、主人が突然の心臓発作に見舞われ亡くなりました。私と5人の子供を残して。……「どうしたらいいの。」私は途方に暮れてしまいました。

**主**の使徒のひとりが、私に次のような約束をしてくれました。「主はあなたをひとりのまま置き去りにされることはなく、今後あなたのために必要なすべての務めを果たして下さるでしょう。主はあなたの努力にひとつ残らず報いてくださいます。これは確かなことです。」

若くして亡くなった主人の葬儀で、このような慰めに満ちた言葉を述べてくださったのは故りチャーズ・L・エバンズ長老(十二使徒定員会会員。1906—1971)でした。そのときはエバンズ長老の言われた「報い」という言葉の意味が私はよく理解できませんでしたが、その言葉は私の心の片隅に何年もの間とどまっていました。当時の私には将来を思い描くことができなかったのです。

しかし、私たち家族がひとり取り残されているのではないこと、愛に満ちた天の父が祈りを聞いてくださっていることは、はっきりわかりました。16歳を頭に4歳までの5人の子供たちも、そのことをよくわかっていました。放送関係の仕事に携わっていた子供たちの父親は口癖のようにこう言っていました。「おまえたちの声や心の中で思ったことは、ちゃんと主に聞こえるのだよ。生活が正しい波長に合っていれば、祈りを通して声や思いは主に届くものさ。」幼い未亡子のデビッドは、父親を亡くしたその日の晩に祖母のひざでこう祈りました。「どうぞお父さんを祝福してください。ぼくが天国へ行ったときに元気で会えますように。」

主人が突然の心臓発作で亡くなったのは、家族でユタ州に旅行に来ていたときでした。ショックでまだ呆然としていた私は、最初の大きな岐路に直面しました。私たちの住んでいる家は、3,000キロも離れたワシントンD.C.にありました。「どうしたらいいの。両親や昔の友人たちがいるユタに戻った方がいいのかしら。それともこれまで家庭生活を築いてきたワシントンにとどまった方がいいのかしら。」私は途方に暮れてしまいました。

すると大家族の長老格である92歳の祖父がよい助言をしてくれました。「とりあえずワシントンの家に帰りなさい。少なくとも1年は置かれた状況をじっくり考えてからでなくちゃ、突然家族で引っ越すのは賢明とは言えないよ。」



それはむずかしい決断ではありませんでした。住み慣れた家庭は安らぎの場で、どの部屋にも思い出がありました。どこか別の土地で再出発するのは、もっと大変だっただろうと思います。

しかも、ワシントンD.C.では教会が強くと急速に成長していました。大人から小学生に至るまで教会員は教会との強い一体感を持っていました。末日聖徒であることを公言するごとに教会の教えを実践する必要性を自覚し、同時にそれが、誓約を守ることによって福音への揺るぎない証を築く機会になるのです。

ここでは伝道活動がとても盛んでした。家の近所にはキリスト教のいろいろな宗派の美しい礼拝堂がたくさん建っていました。家へ戻ってから数カ月、そして数年とたつうちに、子供たちは別の宗派に属している学校の友達に招かれるようになり、そこでモルモン教の教えについて何度も説明しました。そしてほかの宗派の若人やその指導者たちから質問を受けたり関心を示されたりすることによって、かえって子

供たちは自分の知識を増し、信仰を強めることができました。その結果たくさんの友達ができ、教会員になった人も何人かいました。

振り返ってみると、助け合える近所の人々、学校、教会の友人たちの中で暮らす道を選んだ方が知恵にかなっていたことがわかります。私たちは夫という大きな支えを失いはしましたが、それによって安定した生活が崩れることはありませんでした。

夫の死後1年は、悲しんでいる暇などありませんでした。ひとりで子供を育てるといって、新しく、とてつもない自分の立場に振り回されていたのでした。夫のラルフが生前、家のことをほとんど取り仕切ってくれていたのので、私はラルフの判断や指導にかなり頼っていました。そこで家庭での私の権威を確立することがまず最初に必要なでした。子供たちは、誕生日や母の日のカードに司令官の服に身を包んだ母親の絵を書いておもしろがったことがありましたが、そのときついに私は自分の権威が家族に認められたことを知りました。下の子が上の子供たちにこう言っているのを聞いたこともありました。「お母さんとお父さんがまた一緒になったら、どうなるんだろうね。だってお母さんが一番偉くなっちゃったんだもの。」

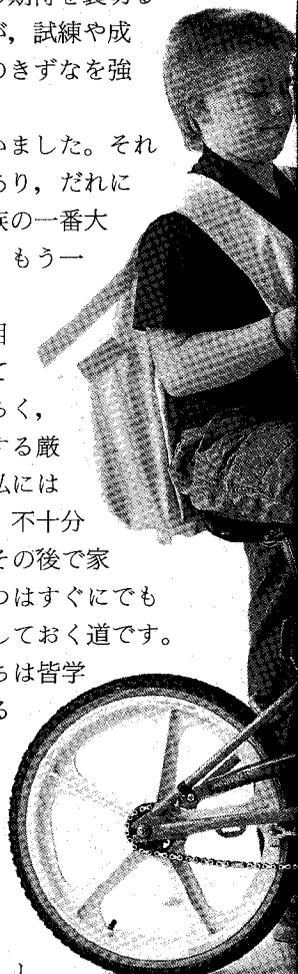
しかし我が家には特別な守り手がいきました。父親はすでに私たちの手の届かない世界へ去って行ってしまいましたが、霊的な意味ではそうではなかったのです。私はこれを十代の娘アリソンの次のような言葉で気付きました。「ねえ、お母さん。私はいつでもお母さんの目から逃れることができるんだけど、お父さんからはそういうわけにいかないわ。」このとき、私はエバンズ長老の約束を思い出し、それが確かであることを知ったのです。

末の子は、父親がいなかったことはいないと言い張ります。この子にとって亡くなった父親は、いつも実在の人でした。ですから家族の永遠性を保証する誓約や約束について知るはるか以前から、末の息子は直観的に家族が永遠に続くものであることを理解していました。そしてこの思いは、子供たちの中で、理想と仰ぐ父親に失

望されなかったためにも、みずからのふさわしさを証明したいという望みへと変わっていきました。私はたとえば、自分の管理の職を立派に果たしたいという気持ちで頭がいっぱいでした。私の永遠の伴侶や天父の期待を裏切るわけにはいきません。そうした目的意識が、試練や成功を迎えるたびに、以前にも増して家族のきずなを強めてくれました。

中でも神殿結婚は特別な意味を持っていました。それは私たちがすすがることのできる心の錨いかりであり、だれにでもいつの日か手の届く祝福でした。家族の一番大きな望みは全員で主のみこころを行ない、もう一度家族で共に住むことでした。

ラルフの死後、解決を迫られたふたつ目の大きな問題は、これからどう生計を立てていくかということでした。これはおそらく、夫を失ったほとんどの女性がすぐに直面する厳しく恐ろしい現実だと言えるでしょう。私にはふたつの選択肢がありました。ひとつは、不十分ながらも今ある蓄えを使い切ってから、その後で家族の生計手段を考えることで、もうひとつはすぐにでも職を探して、予備にいくらかの蓄えを残しておく道です。私は後者を選びました。幸いにも子供たちは皆学校に通っていて、年上の娘が私が帰宅するまで留守を預かってくれたので、日中、家を空けることができました。子供たちが新しい状況に適応し、私に信頼を寄せる姿は、さながら「神は天にましまし、母は地にて養う」とでもいった図でした。私は大学を卒業する前に結婚したので、十分な能力を身に付けていませんでした。しかし商業英語とタイプの補習課程を受講し、一から始める用意ができました。まず初めは受付係でした。これはさい先のよいスタートでした。こうして勉強を積むうちに責任も増し、仕事の幅を広げる機会にも恵まれました。政府の金融機関で過ごしたこの何年かの経験を通じて、自分の興味の幅を広げ、さらに教育を受け、技術



子供たちは料理や掃除を手伝い、私が仕事で留守の間、自分で音楽教室や運動場に通う手段を見つけました。働ける年齢になると、皆、夏休みの間中働きました。



を伸ばし、自信を深めることができました。

さらには、経済的な力を付け、先行きの不安も取り除かれました。これこそ、私には想像することもできなかった「報い」の意味だったのです。最初に仕事を始めたとき、私はある決断をしました。私がひとりで子供を育てることに成功したとすれば、その大半はこの決意を守ったおかげでした。それは、残りの自由な時間をすべて子供たちのために使うということです。自由な時間というのは夕方以降のことで、ときどき外出する以外は毎日子供たちと一緒にいました。私は日中は家を留守にしているので夜は家にしようと決めたのです。これは以前と比べると大きな変化でした。夫は生前あるテレビ局の管理職にあり、その関係で私たち夫婦は仕事や社交上の忙しいスケジュールに合わせて夜は町の内外へ出掛けて行くことが多かったからです。以前は、人との会話に熱中しているような振りをして、実は子供たちの宿題や家での夕食がどうなっているか気をもんでいたことがたびたびありました。ふたりで旅先にあるときにも、子供たちの居場所が気になりました。夫の死後、翌年からこのような生活は変えようと私は心に決めました。夜、

「心をつくして主に信頼せよ、自分の知識にたよってはならない。  
すべての道で主を認めよ、そうすれば、  
主はあなたの道をまっすぐにされる。」(箴言3：5-6)

子供たちは家で、だれよりも私を必要としていたのです。

将来を左右するすべての決定は、私ひとりで下せるわけではありませんでした。子供たちとも相談して決めました。子供たちは試行錯誤を繰り返しながら料理を覚え、家の掃除が上手になっていきました。昼間は母親が仕事でいなかったので、子供たちは外出するにも自分で歩いて行ったり、自転車やバスを使ったりしました。ケネディ大統領の有名な言葉をもじって、「母親が自分のためにしてくれることを問うのではなく、自分が母親のために何ができるかを問う」というのが我が家の合い言葉になっていました。子供たちは皆働ける年齢になると、夏休みの間働きました。まだ幼い一番下の子供でさえ、丁寧に磨いた石を持って近所の家を1軒1軒売りに回ったことを私は知りました。こうして子供たちは、間もなく自活することを覚えていきました。

私は若くして未亡人になりましたが、信仰を強く持ち、希望に満ちていました。その信仰と希望を子供たちにも伝えようと思いました。そして家族のだけれども、豊かな前途が開け、生活の中に神のみ手があることを強く感じました。

友人や親類もまた私たち家族の幸せを願って、いろいろな意見やアイデアを提供してくれました。その中には、子供たちの夏の仕事、学業、奨学金、そのほかもろもろの貴重な助言と援助もありました。病気のとき、困ったとき、子供たちが思春期のむずかしい時期を迎えたときに、いつも友人たちの助けがありました。そして、家族の活動や父と子の野外活動、そのほかの行事に私たちを誘ってくれました。監督や神権指導者はいつも相談に乗ってくれました。親切を多く受けるばかりで、かえってつらい気持ちになることもよくありましたが、それによって私も子供たちも、主の祝福は直接私たちのこうべに注がれるのではなく、人々の思いやりや働きを通して与えられるものであることを学びました。

死別か離婚かにかかわらず、夫のいない母親の務めはきわめて特殊な召しであり、女性はその管理の職をどのように果たしたか主のみ前に責任を問われます。たとえ伴侶を失った女性でも、主がすべての親に託された次の

責任を負っているのです。「また両親はその子供たちに祈ることと、主の前に正しく歩むことを教えざるべからず。」(教義と聖約68：28。25-27, 29-32節参照)ときには不当に重い責任が自分に負わされていると感じることもあるでしょう。それでも、務めを果たせるように主は必ず道を備えてくださるという約束があります。(I ニーフай 3：7 参照)

親が教えなければならない最も大切なことは、霊的な価値観です。十二使徒評議員会のボイド・K・パッカー長老はこう勧めています。「子供が興味を示し、教えやすい状態のときに、親は機を逃さずその場で教えるべきである。」(「汝ら熱心に教えよ」p.110)

子供たちが霊的な飢えを示したときに、それを満たすのです。私はこうした勧告があることを知らないまま、すでにそれを実践していました。食事の準備をしながら、学校へ子供を送りながら、夕食のテーブルを囲みながら、気軽に福音の教えについて話し合いました。キリストの贖罪や再臨のような話題も、政治や学校での出来事と同じように、頻りに家庭での話題に上りました。

長年の間、私は次の聖句を何度も試しました。「心をつくして主に信頼せよ、自分の知識にたよってはならない。すべての道で主を認めよ、そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。」(箴言3：5-6)

私たちは「現世」という小さな窓から永遠の世界を見えています。ちょうど「わたしたちは、今は、鏡に映して見るようにおぼろげに見ている」(I コリント13：12)のです。しかし、やがて各自の生活の意味を永遠の観点に立ってはっきりと理解する日が来るでしょう。そのとき、私たちは今は信仰の力で理解している事柄を、完全に知ることになるのです。私たちが主を求めるとき、主は私たちをひとり置き去りにはされないこと、私たちのために必要なすべての務めを果たしてくださること、必ず報いを与えてくださること、などについてもはっきり知るでしょう。人に弱点を知らせ、その弱点を強さに変える機会を与えて主は私たちの中のくずを金に変えてくださるのです。□

# 祈りを通して主を覚える

目的——「誠心誠意でその上キリストを信じながら問う。」(モロナイ10：4)

**雨**が降る10月のある寒い日のことでした。デンマークのコペンハーゲンに住む若い母親メット・ハンセンは、自転車で職場から帰る途中、自動車と接触事故を起こしてしまいました。夫はちょうど仕事で国外に出張していました。4時間病院のベッドに横たわったまま、彼女は託児所に預けたふたりの小さな子供に連絡を取ることができませんでした。彼女は、子供たちに自分が無事であることを知らせ、ふたりに上に平安と守りがあるようにしてくださいと、主に祈りました。

手当てを受けてから家に帰り着いたのは夜の10時15分でした。子供たちはいつまで待っても母親が迎えに来ないのにしびれを切らして、自分たちで家に帰って来ていました。ふたりはアパートに着いたものの、<sup>かぎ</sup>鍵を持っていませんでした。どうしていいかわからず、ドアマットのところにひざまずいて祈りを捧げ、それからしばらくの間座り込んで話し合っていました。

彼女の息子はその時のことをこう話しています。「そうしたらぼくにすごいことが起きたんだよ。大きな温かい手がぼくの上に置かれたような気がして、それからやさしい声が聞こえてきてこう言ったんだ。『お母さんは大丈夫。……ほんのしばらくすれば帰って来るよ。外はすっかり暗くなるけれど、あわてないことだ。』」



それから何年もの歳月が流れましたが、ハンセン姉妹と子供たちは天父が祈りに答えてくださることに疑いを持つことはありませんでした。

私たちはイエス・キリストのみ名を通して天父に祈り、聖霊を通して答えを受けます。神会のお三方が祈りを通して、私たちに導きをくださるのです。

祈りには、感謝の思いを示す祈りもあれば、食事の祝福を願い求めるような簡単な祈りもあります。また、思いのたけを込めて助けを求める祈りもあります。このように祈りには様々なものがありますが、イエスは私たちに「誠心誠意でその上キリストを信じながら」(モロナイ10：4)祈るようにと命じておられます。

## 神の導きを求める

私たちは皆神の導きと恵みを必要としています。標準聖典の中には、祈り求める人に主が導きを与えられた例が数多く載せられています。旧約聖書に

登場するリベカは、胎内に宿した子どもたちのことで心を悩ましました。「彼女は行って主に尋ね」、ふたつの国民が自分の子孫から出るということを知らされました。(創世25：21—23参照)ジョセフ・スミスの祈りは福音回復の道を開きました。

トーマス・S・モンソン副管長は、いつ、どのような理由で捧げられるかにかかわらず、「祈りには、より多くの問題を解決し、より多くの苦痛を和らげ、より多くの過ちを防ぎ、人の心に大きな平安と喜びをもたらす力があります。それらのものはほかの方法では決して得ることはできません」と言っています。(「チャーチニュース」1987年4月25日付、p.2)

確かに私たちはこぞって救い主がくださる平安を願い求めています。それは祈りを通して得ることができるのです。

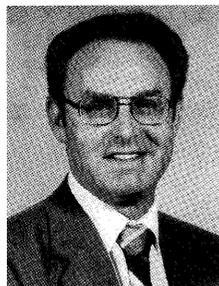
## 訪問教師への提案

1. 訪問先の姉妹と一緒にアルマ34：17—27を読む。この勧告は現代の私たちにどう当てはまるだろうか。「心にあることをうち明けて祈」ることとして、どのようなことがあるだろうか。
2. 祈りを充実したものとするために、ほかの人の事例から何を学ぶことができるだろうか。  
(「家庭の夕べアイデア集」pp.32—35, 89—93参照)

# 教会員ではない人々への召し

**教会員ではない私の友人が、独自の才能や能力をワード部の人々のために使いたいと考えています。彼女は教会の召しを受けられるでしょうか、それとも召しは教会員のみにも与えられるものなのでしょうか。**

本誌の回答は問題解決の一助として与えられたものであり、教会の教義を公式に宣言するものではありません。



ポール・M・ノートン  
ウィスコンシン州マジソン  
ステーキ部 スターキ部長

この質問を考えるとときに覚えておきたいことは、教会員であるなしにかかわらず、「召しに興味を持っている」とか「特別な才能や能力がある」ことは必ずしも召されるための条件にはならないということです。でも、あなたの質問に答えるならば、教会員でない人でも教会の召しを受けることができます。教会員でない人を特定の責任に召すことは、実際には一般に考えられている以上によく行なわれていると言えるかもしれません。それは特に小さ

いワード部や支部について言えることです。

教会での経験を通して私は、教会員でない人々がスカウトや活動委員会、日曜学校や補助組織で働いたり、家族の歴史に関して図書館員あるいはユニットの相談員を務めたり、伴奏者や聖歌隊の指揮者として責任を果たすのを見てきました。特に後述のふたつの責任に教会員でない人を召すことは、実際に教会の手引き〔PBCT0805JA〕の中で承認されています。

教会員ではない人が召しを受けて働くことについては、確かに次のようないくつかの疑問が生じます。自分が所属していない教会の召しをなぜ受けたがるのでしょうか。このような召しはどのようなときに適切なのでしょうか。なぜそうした人にまで召しが適用されるのでしょうか。教会員でない人がある責任に召すとき、ワード部や支部の指導者が最も重要視する問題は、

その人が教会で奉仕をする動機です。本当に無私の気持ちで奉仕をしたいのか、それとも単に自分の才能を認められたいのかどうかということです。

1976年10月の総大会で、七十人第一定員会会員のロバート・L・シンプソン長老は、教会に入って間もないある兄弟の例を話しました。この兄弟は間違った動機で「重要な」地位に就きたいと強く望んでいました。あるとき彼はヒュー・B・ブラウン副管長に会い、こう尋ねました。「ブラウン副管長、教会の監督になるにはどうすればよいのですか。」

ブラウン副管長は答えました。「そうですね、とても簡単ですよ。主から召されればそれでよいのです。」

「主のみ業において、私たちはみずから地位を求めないし、また召されたときにその奉仕の機会を拒むべきではない」とシンプソン長老は語っています。この方針は教会の召しのすべてに当てはまります。私たちは、ワード部または支部の指導者を通して、主から召しを受けるのです。

教会員でない人が召しを受けるのはいつが適切かという質問に戻ります。教会



の召しを果たすには、多くの場合心からの献身と時間的な犠牲が求められ、また旅費やその他の出費を余儀なくされることがあります。教会員でない人はいつそのような決心をし、犠牲を払おうとするのでしょうか。

ひとつの答えは、その人が福音は真実であるという証を持つときです。しかし、もし証があるなら、なぜバプテスマを受け、会員として召しを果たさないのでしょうか。この質問の答えに関して、ワード部や支部の指導者が教会員でない人を召す際に考慮すべきもうひとつの重要な事柄があります。それは個人が置かれている特別な状況です。

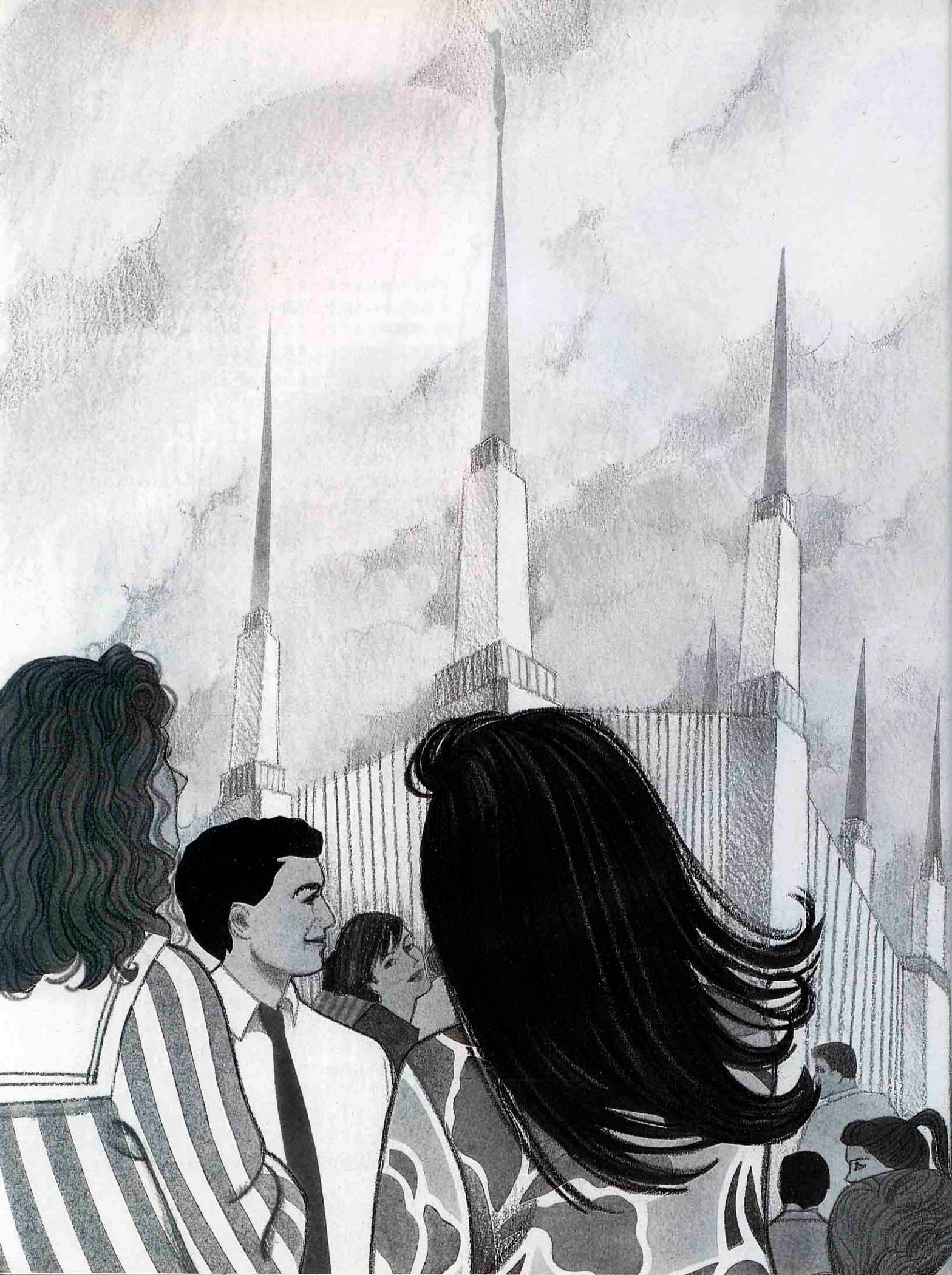
たとえば、私が知っているある若い男性は、教会員ではないにもかかわらず、教会の集会と早朝セミナーに熱心に参加しています。彼は福音について証を持っていますし、バプテスマを受けたいと望んでいますが、両親の許可がもらえないのです。彼のような人にとっては、セミナーの役員あるいはクラス委員長に召されることは大きな喜びと祝福となることでしょう。

もうひとり、教会員でない人で、何年も教会の集会に定期的集っている献身的な姉妹がいます。彼女も証を持っていますが、ご主人は彼女が教会に入るのを

望んでいません。また、奥さんの気持ちを害したくないためにバプテスマを延期している人もいます。彼はいつの日か奥さんが自分と思いをひとつにしてくれることを願っています。このような多くの人々が、靈感を受けた神権指導者によって、教会の責任に召されています。

私たちの教会は参加する教会であり、福音の計画はまさしく人間の成長を基盤としています。その意味から言っても、どこで奉仕するかではなく、いかに奉仕することが重要であるということ覚えておくのが大切です。召しは「報酬」を受けるためにするものでもなく、また「厚意」でするものでもなく、献身的な奉仕の機会なのです。監督には、会員であるなしを問わずワード部の管轄区域内に住むすべての人々と共に働くことについて靈感を受ける権能が与えられています。

教会の方針に従い、教会員でない人は教師や管理する権能を持つ職に召されることはありません。しかし、監督は靈感を通して教会員でない人々の動機や状況をよく見極め理解したうえで、特定の責任に召すことができます。そうすることによって彼らに祝福をもたらし、主の王国の建設を進めることができるのです。□



# 先祖のための神殿団体参入

## — 3つの成功例

リチャード・タイス

あるふたつのステーキ部とひとつのワード部で、先祖のための身代わりの儀式をもっと受けるようにというチャレンジが会員たちに与えられました。その結果は驚くべきものでした。

必ずしもすべての人が神殿に参入できるわけではありません。それでも、どの教会員も先祖のために神殿で儀式を行なう手助けができます。ここに紹介する教会員たちのように、あなたも先祖を探して家族の歴史を作成し、亡くなった先祖の名前を神殿に提出することができます。名前を提出した先祖のために自分で儀式を受けられる教会員もいます。ここに紹介するのは、「先祖を神殿に導く」ことを決心した聖徒たちの物語です。

**ユ**タ州セントジョージ神殿に参入するためネバダ州ラスベガスから訪問していたその一団の人々には、何か特別な雰囲気がありました。この参入者たちは皆、自分の家族や先祖の儀式を受けるために来ていたのです。彼らはあるプログラムに参加した人々なのですが、そのプログラムを通して、ワード部の人々は前の年の10倍に相当する先祖の名前を提出し、神殿の儀式を受けました。

メイン州オーガスタステーキ部からワシントン神殿にやって来た約110人の青少年のグループにも、同じような雰囲気が感じられました。彼らは自分で儀式に必要な情報を調べ、亡くなった親族のためにみずから身代わりの儀式を受けに来たのです。

ユタ州リバートン北ステーキ部から同じ州のジョーダンリバー神殿にやって来た数百人の会員たちもそうです。彼らは、2日間で1家族平均15以上もの先祖の身代わりの儀式をしました。

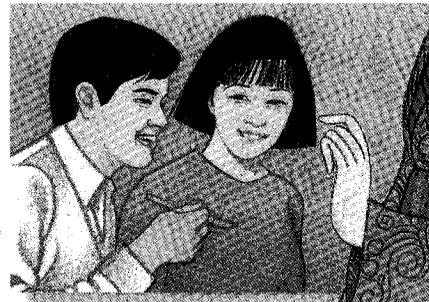
以上の成功例はいずれも指導者たちがステーキ部やワード部に神殿団体参入を呼びかけた結果、生まれたものです。先祖のための神殿団体参入の目的は単に神殿に参入するだけでなく、先祖に奉仕することにあります。



**ラ**スベガスワード部のラリー・ハルゼー監督は、ワード部の会員たちがこれまで以上にエライジャのみたまにこたえられるようにするには、どうすればよいか考えていました。そのうちに突然、個人でもある程度のことではできるが、ワード部が一丸となって作業を進めればはるかに多くのことができると気づきました。1986年の12月、ハルゼー監督はワード部の会員たちに、亡くなった先祖または家族ひとりの名前を各自で提出し、翌年神殿の儀式を受けられるようにチャレンジを出しました。次いで、神権役員会とワード部コーディネーション評議会でこの問題を取り上げ、会員たちを助ける方法について討議しました。ハルゼー監督はこう語っています。「私は家族の歴史の探求は大変だという観念を一掃しなかったのです。ひとりの名前を出すだけなら尻込みする人も少ないだろうと考えたわけです。それでもワード部全体で先祖の名前が集まれば、すばらしい成果が期待できることを確信していました。」

監督はプログラムの調整を大祭司グループリーダーにゆだねました。ワード部の指導者たちは、神権会で、扶助協会や青少年の集会で、その概要を説明しました。その年の7月には、監督はワード部で発行している新聞の中で、もう一度、このプログラムを強調しました。初めはゆっくりではあったものの、やがてワード部の会員たちも心を留めるようになってきました。

このプログラムはワード部の全会員が対象だったので、ワード部の指導者たちは神殿参入の準備についても、併



せて強調しました。神殿準備セミナーが開始され、ホームティーチャー、訪問教師、友人たちも一緒になってお休み会員がこのクラスに出席できるように助けました。日曜学校には家族の歴史クラスが設けられました。扶助協会では家族の歴史相談係を召して毎週2、3分発表を行ない、作業が進むように励ましました。

こうして1988年4月までには、ワード部の団体参入に十分な数の名前がそろいました。最初の団体参入には18人のワード部の会員が参加しました。ふだんは、片道2時間かかるセントジョージ神殿の参入には5、6人しか集まらなかったのです。

この団体参入の体験談が紹介されると、会員たちの関心も高まって、プログラムはステーキ部にまで引き継がれました。その間、4月の団体参入に参加しなかったワード部の会員たちは、自分たちの作成した記録を提出できるように、援助を求めるようになってきていました。その後、ハワード・ワイズマン兄弟は自分の先祖のために182回以上も儀式を受けました。

ワイズマン兄弟は夫婦で家族の歴史相談員として召され、ワード部の会員たちを訪問するようになりました。家族の傍らに座って「家族の記録」の作成を助け、作業の進め方を教えました。テリー・ワイズマン姉妹はこう語っています。「大勢の人がすでに情報を集めていて、後はただ記入の仕方や提出の方法を知らせればよい状態でした。私たちは自分の責任を伝道活動だと思い、一人一人に教えています。その中には、夫婦の一方が教会員で

はない家族やお休み会員の家族、若い独身者、未亡人やその子供たち、ワード部やステーキ部の指導者たちもいます。そして、自分が進めている作業のために祈るようにチャレンジしています。」

ハルゼー監督は次のように述べています。「ワード部の会員が、ひとたび、このプログラムに参加すると、家族の歴史活動がどれほど簡単なもので、どんなにすばらしい報いが得られるか理解するようになります。こうして、プログラムが軌道に乗るようになったのです。」

1988年の末には、ワード部の会員たちはセントジョージ神殿での儀式のために1,018人の名前を提出したのです。ワイズマン姉妹の語るように、「人々は自分の愛する人のために働くようになると、もっと熱心に家族の歴史探求に取り組むようになります。」

ステーキ部が主催した団体参入の日、儀式を受けた多くの聖徒たちは、先祖がその場に立ち合っているように感じました。この日ほど深い平安を味わったことはかつてなかったと証する聖徒たちも大勢いました。

**メ**ーン州オーガスタステーキ部に集う青少年たちにとっても、神殿活動は重要な意味を持っています。このステーキ部の青少年たちは毎年4月にワシントン神殿に参入し、死者のための身代わりのバプテスマを受けることにしています。今回、つまり1988年4月の団体参入が計画されたとき、指導者は青少年たちに次のようなチャレンジを与えました。それは、家族の助けを得てひとり以上の先祖の資料を集め、自分で神殿に提出する記録を作成するというものでした。

このチャレンジを受けた青少年たちの反応は感動的なものでした。作成の手間がふだんよりはかかったものの、それでも参入のときまでには150人の先祖の名前が儀式のために用意されました。ステーキ部内のほとんどすべての活発な青少年、約110人が今回の訪問に参加したのです。このうちほぼ65人は、自分の先祖のために儀式を受けることになっていました。

青少年たちは14時間車に揺られてワシントン神殿に着くと、翌日は一日中、死者のためのバプテスマに参加しました。その夜、ワシントンD.C.ステーキ部センターで開かれたファイヤサイドで多くの青少年が、神殿での経験を通してみたまを受けるとどのように感じるかがわかったと証しました。特に、自分の亡くなった先祖のために儀式を受けた青少年たちにとっては、この団体参入は意味のあるものとなりました。

**ユ**タ州のリバートン北ステーキ部では、先祖を神殿に導くというチャレンジが、ジョーダンリバー神殿の神殿長会から出されました。ステーキ部長会は1987年12月29日と30日の2日間に神殿の団体参入を行なうと決め、初日は青少年が先祖のためのバプテスマを受け、翌日には成人会員が洗い清め、エンダウメント、結び固めを受ける計画を立てました。これは神殿の混雑の緩和

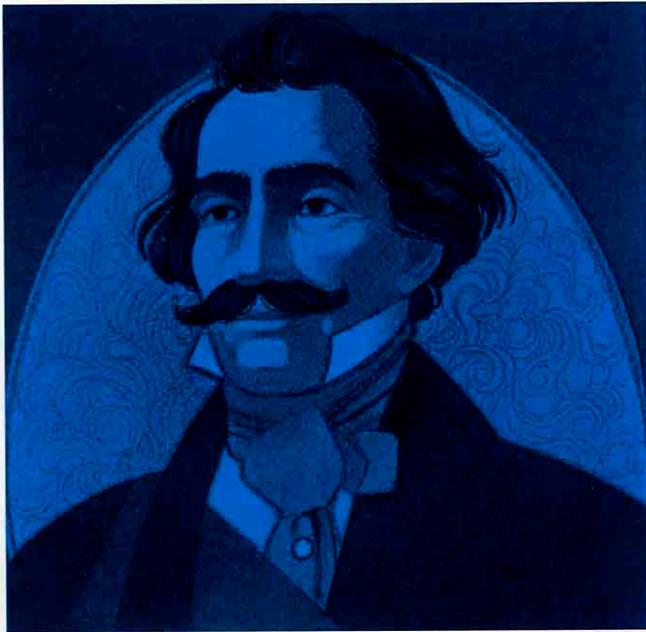
を図るためです。そしてその年の終わりまでに、ステーキ部内のすべての神殿推薦状所持者が自分の先祖のために神殿の儀式を受けるという目標を掲げました。

デュアン・B・ウィリアムズ神殿長は、リバートン北ステーキ部の場合かなり準備が整っていた点を指摘しています。「このチャレンジが成功した一番大きな理由は、ステーキ部と各ワード部ですでに家族の歴史プログラムが実施されていたことにあります。ステーキ部では1組の夫婦がステーキ部家族の歴史スペシャリストとして召されていましたが、どのワード部にも夫婦が1組、家族の歴史相談員として置かれていました。しかも、ワード部の日曜学校では家族の歴史クラスが開かれていたからね。」

大祭司グループリーダーと家族の歴史相談員は神権会や扶助協会、若い男性や若い女性の集会に出席してこのチャレンジについて話し合い、プログラムについて説明しました。彼らは記録の書き方、提出の時期などを指導し、ステーキ部の神殿団体参入の日程を伝えました。同時に、相談員たちはワード部の会員と個別に接触を図り、直接家庭に訪問して記録の作成を手伝いました。

ステーキ部ではある土曜日を利用して、家族の歴史作業会を設けたりもしました。情報を集め、記録を作成するといった一連の作業を、実際に経験できるようにすることが集会の目的でした。

その結果は驚くべきものでした。12月29日と30日の両日で、160家族以上が神殿に参入したのです。ステーキ部の会員たちは2日間で2,500以上の儀式を完了しました。しかも全部、自分たちの先祖のための儀式だったのです。あふれるばかりのみたまが注がれました。儀式の間、自分の先祖がそこに来ていると感じた聖徒は大勢いました。たとえばある姉妹は自分の先祖の腕に抱かれているのを感じ、そのあふれるような大きな愛に胸がいっぱ



## 神殿団体参入を 実りあるものと するために

いになったと述べています。多くの会員がかつてなかったほどの完全な平安を覚えたこと証しました。

こうした経験談を聞いて、ステーキ部内のほかの会員たちも大勢、神殿に参入する準備を始めました。ある監督の報告によれば、神殿の団体参入を終えたある日の仕分の一面接の中で、長い間神殿推薦状を持っていなかった2組の夫婦が、もう一度神殿に参入できるように仕分の一を完全に納めたといいます。彼らは団体参入のいろいろな経験談を聞いて、自分たちも神殿の祝福を受けたいと思ったということでした。

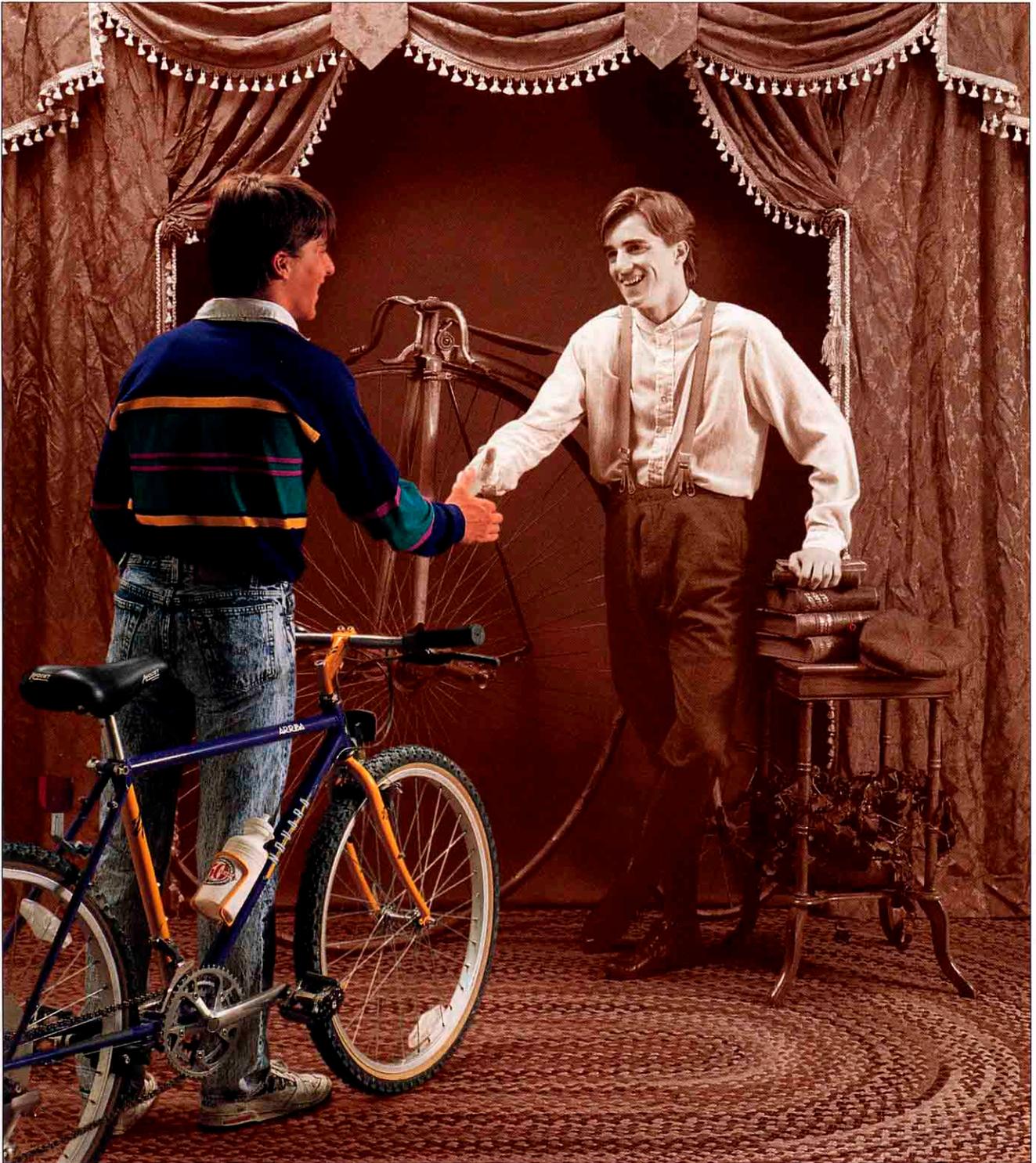
ここに紹介したワード部やステーキ部の会員たちにとって「先祖を神殿に導く」このような団体参入の経験は、心の中に深く刻み込まれました。ハワード・ワイズマン兄弟はそれを次のように説明しました。「ちょうどヨセフがエジプトで自分の兄弟たちと再会したときのようなものです。兄弟たちは、まさかヨセフに生きて会えるとは思っていなかったのですが、ヨセフは自分の身を明かしてこう語りました。『神は命を救うために、あなたがたよりさきにわたしをつかわされたのです。……神は、あなたがたのすえを地に残すため、また大いなる救をもつてあなたがたの命を助けるために、わたしをあなたがたよりさきにつかわされたのです。』(創世45:5-7)彼らは互いに抱き合い、涙を流しました。先祖の名前を探求し、彼らのために神殿で救いの儀式を受ける兄弟姉妹はだれでも幕のかなたでヨセフやその兄弟たちと同じような気持ちを味わうのではないのでしょうか。」□

教会の家族歴史部は、自分の先祖のために神殿で儀式が受けられる状態にあつて、ワード部またはステーキ部が神殿団体参入を予定している場合のために、次のような指針を紹介しています。

1. 会員が先祖の情報を収集し記録を作成するための期間を、少なくとも2カ月は取れるように配慮します。こうすれば、急いで提出するときに起きやすい記入ミスを防ぐことができます。また、記録の提出者以外の人に、記入漏れや書き間違いがないかチェックしてもらいます。神殿で名前を処理する段階に入ってしまうと、たとえ神殿職員であっても訂正することはできません。
2. 団体参入の期間で儀式を受けられるだけの名前を提出するように、会員に伝えます。それ以上の名前は家族ファイルとして提出します。
3. たくさんの記録をまとめて一度に提出するのではなく、ある程度枚数がまとまった段階で、その都度提出するようにします。どの「家族の記録」にもステーキ部名と神殿の団体参入の予定日を明記してください。
4. 「家族の記録」には必ず提出者の住所と名前を記入します。問題や質問が生じた場合に照会しやすいように、できれば電話番号も記入しておいた方がよいでしょう。

神殿の団体参入を成功させ、参加者全員が霊的な体験ができるようにするには、以上の指針を取り入れるとよいでしょう。□

# 古い友人をたずねなさい



あなたのおじいさんのおじいさんは、すばらしいユーモアのセンスの持ち主で、当時流行の最新式の自転車に乗っていました。  
彼だけでなく、ほかの偉大な人についても調べなさい。  
あなたの先祖を調べなさい。彼らを自分の友としなさい。



# 聖書の地理

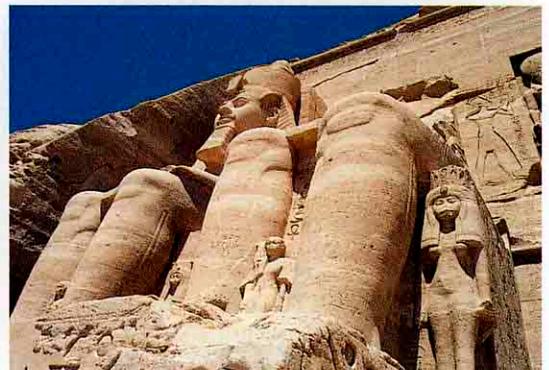
旧約聖書の時代、ヤコブの子孫は、エジプトで400年以上もの間、つらい奴隷生活に耐えていました。主はヤコブの子孫を救うために、予言者モーセを遣わされます。ヤコブとの約束を守って(創世46：2-4；50：24-25参照)、主はヤコブの子孫をエジプトから導き出し、シナイの荒野で契約を新たにされました。しかし、イスラエルの民は、主とその僕たちに向かって絶えずつぶやいていたため、イスラエルの民は約束の地を見ることなく、その子供たちが地を受け継ぐであろうと主は断言されました。(民数14：1-39参照)ヨシュアが次の世代を聖地へ導くまで、イスラエルの民は、40年の間荒野にとどまりました。ここに紹介する様々な写真によって、私たちはかつてイスラエルの民が親しんだ様々な風物をたどることができます。



1

1. ここで行なわれているような泥かられんがをつくる方法を、古代のイスラエル人は容易に考えついたでしょう。エジプトの奴隷時代にもこれと同じ作業が行なわれていました。(出エジプト1:14; 5:6-9参照) ナイル河から運んできた泥にわらを混ぜ、型に流し込みます。次に地面の上で型をはずし、天日で乾かします。この簡単な作り方は、今でも世界の各地で利用されています。

2. エジプトのルクソールにあるラメセス2世の石像。神殿をはじめとするエジプトの建造物は「パロ」と呼ばれたエジプトの王がみずからの功業を記念し、彼らの神々をあがめるために構築しました。最も力のあったパロのひとり、ラメセス2世の統治期間は60年以上に及び、イスラエルの民はこの王によって奴隷の境涯に置かれたものと考えられています。



2





6

6. 聖書の時代、シャロン平原はマナセの部族に割り当てられた土地でしたが、「マナセの子孫は、これらの町々を取ることができなかったので、カナンびとは長くこの地に住み続けようと」しました。(ヨシュア17：11-12参照) シャロン平原は、ソロモン王の治世には、「ヘベルの地」と呼ばれ、住民は宮廷に食物を供出しなければなりませんでした。(列王上4：27参照) この写真に見える遺跡は、紀元前22年にヘロデ大王が創設した海港カイザリヤです。遠景にはカルメル山を望むことができます。かつてエリヤがバアルの予言者たちに挑戦した場所はこの山でした。この平原は聖書時代には森林地帯でしたが、現在では開墾されて、イスラエルの中でも経済的な価値の高い農耕地になっています。

7. ヨッパ(現ヤッファ)は、現在のテルアビブの南端に位置する地中海沿岸の海港です。現在ではほとんど利用されていませんが、ソロモンの時代にヨッパは南東に約55キロ離れたエルサレムへ、物資を供給するための主要な港でした。ソロモンが神殿造営に使用したレバノン杉も、ヨッパを経由して輸入されました。(歴代下2：16参照) ヨナは主の前を離れてタルシシへ逃れようと、ヨッパから船に乗り込みました。(ヨナ1：1-3参照) 1841年、十二使徒定員会のオルソン・ハイド長老はヨッパから上陸してエルサレムへ行き、「ユダヤ人の帰還」のためにこの地を奉獻しました。

7



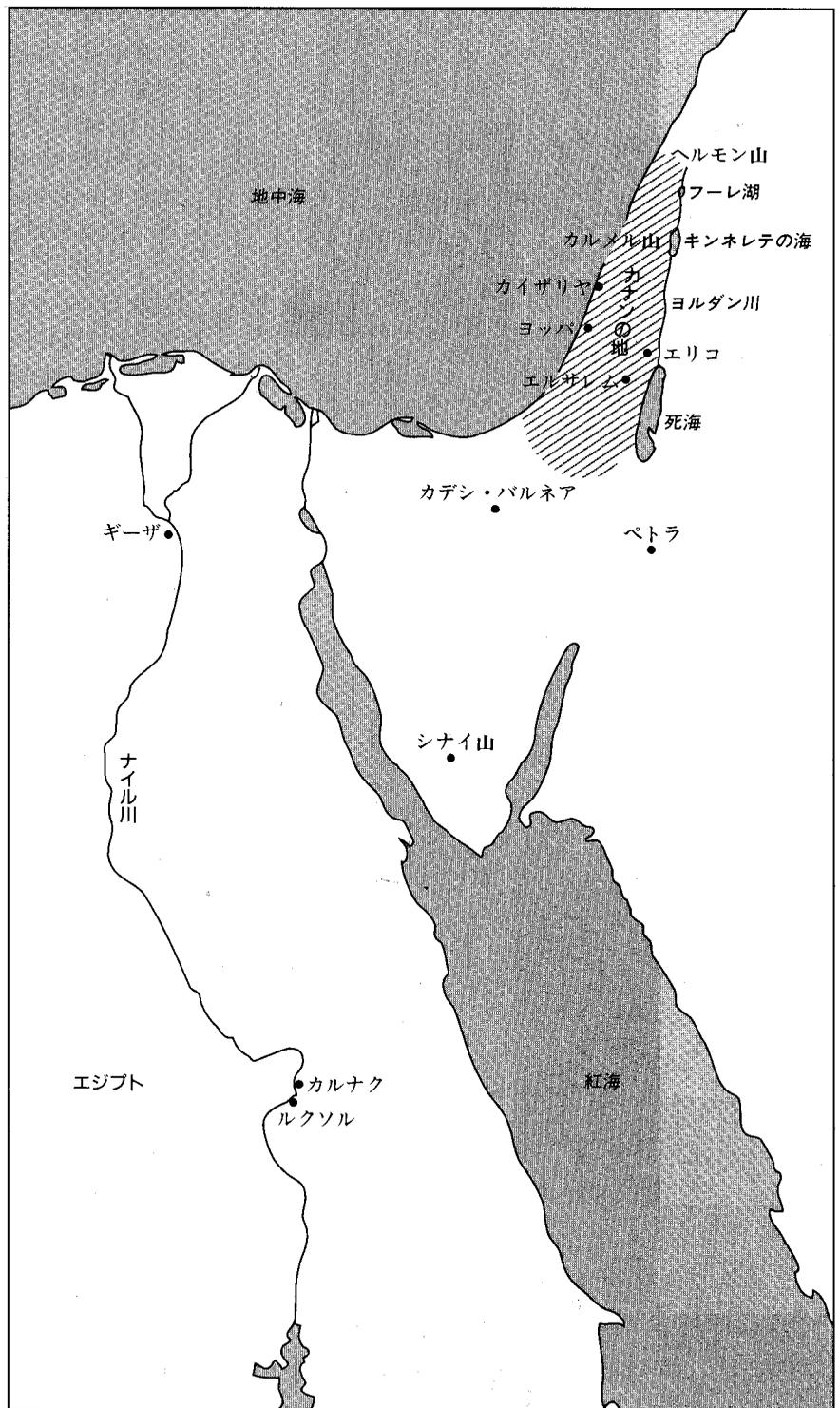
8





8. キンネレテの海。新約時代には「ガリラヤの海」として知られていました。漁師たちは、現在に至るまで何世紀もの間、ここを漁場として生計を立ててきました。旧約時代、ガドの部族がこの沿岸に住みついたことが聖書に記されています。(申命3:17参照)

9. 麦のひわけ。風を利用してもみがらを吹き分ける方法は、現在でも聖書の時代と同じように行なわれています。この麦ともみがらのひわけは、主が義人と悪人を選り分けることに、よくたとえられます。(詩篇1:4参照)





10

10. 現代でも見かけますが、牛は聖書時代、すきを引く家畜として利用されました。また収穫した麦の束を足で踏みつけて、脱穀するのにも使いました。

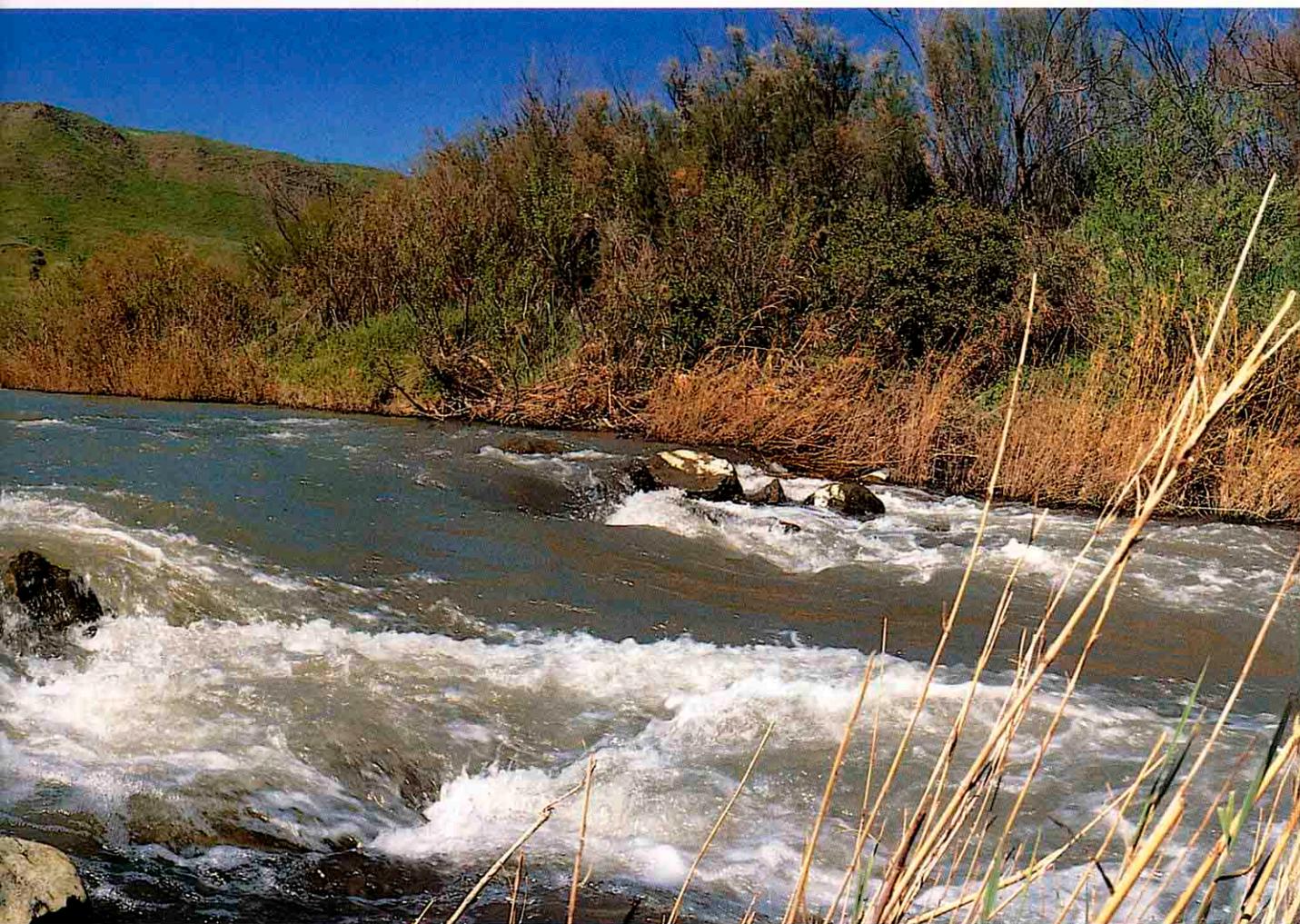
11. ヨルダン川は水の主要な供給源ですが、現イスラエルの北方に位置するヘルモン山のふもとでわく泉を水源とし、フーレ湖(メロムの水)に合流して南に流れ、最後は死海に注いでいます。ヘブル語で「ヨルダン」とは「下る流れ」という意味で、その160キロに及ぶ距離を水源から下って海面下200メートルの地点を通過し、ほぼその2倍の深さにまで流れ下ります。またヨルダン川は、イスラエルの民が荒野での滞在に別れを告げて約束の地へ向かうとき、最後の障壁となりました。イスラエルの12の部族を代表する12人の祭司たちは契約の箱を運び、ヨルダン川の水際まで来ました。主は、何年も前に紅海を分けられたときと同じように、ヨルダン川の流れをせき止められました。「すべてのイスラエルが、かわいた地を渡って行く間、主の契約の箱をかく祭司たちは、ヨル

11



ダンの中のかわいた地に立っていた。そしてついに民はみなヨルダンを渡り終った。」(ヨシュア 3：17)それから主は、祭司たちが契約の箱を肩に負って立っていた場所から石を取って石碑を建て、この出来事の記念とするようヨシュアに命じられました。その仕事が完了すると同時に、主はヨルダン川の流れを元に戻されました。イスラエルの子らは、こうしてついに約束の地に着いたのです。(ヨシュア 4：1-11参照)

12. 旧約時代には、無数の羊が飼われていました。今日でも羊は国中至る所で飼われています。羊飼いは、昔と同じように現在でも群れの前を歩き、羊たちはそれを慕うように後ろから従って行きます。羊は飼い主の声を即座に聞き分けます。ダビデ王は、昔の予言者たちと同じように、「主はわたし〔たち〕の牧者」であることを知っていました。「主はわれらの神であり、われらはその牧の民、そのみ手の羊である。」(詩篇23：1；95：7)□



# どうぞ キャシーを 祝福して ください

自分を傷つけた人のために祈ることが、  
本当に役立つのでしょうか。

イエスは山上の垂訓の中で「あなたの敵を愛しなさい」と私たちに言うておられます。現在の教会の指導者たちも、私たちがほかの人に対して悪い感情を抱くとき、この教えのようになさいとしばしば勧告しています。私は大人になるまで、その勧告を、口では言えても実際には絶対できないことだと考えていたものです。ところが、自分の嫌いな人のために祈るという特別な機会が、私の人生の中にもやってきました。私の人生を変えた祈りと赦しの経験から、私はこの勧告に託された知恵を学んだのです。

事の始まりはこうでした。私は、自分の通う小さなワード部で、若い女性の年齢になりました。たくさんの活動に参加して、私はそのどれにも最善を尽くそうとしました。若い女性の一員になれたことがうれしく、いつも一緒にいる4人の女の子と友情を深めようと努力し始めました。ところがほどなくして私の喜びは心の痛みに変わっていきました。この4人の少女たちが、私の生涯の最も大きな試練のひとつとして私の前に立ちはだかったからです。

彼女たちは私の才能をねたんで、私の自尊心をくじくために、自分たちにできるあらゆることをするようになったのです。最初は、私の悪口を言うて回るだけでした。それが次には、一緒になって日曜学校で私をからかうようになったのです。あるとき、若い女性のクラスで、私はそのうちのひとりの隣に座りました。すると彼女は立ち上がった、部屋の反対側へ移動してしまいました。私が提案したり、責任者になったりすると、彼女たちは決まって活動を休み、責任を果たそうとしないのでした。

それでも私は標準を守ろうとして一生懸命に活動に参加し、若い女性の確認証を受けたりもしました。しかし、それによって彼女たちとの仲が改善されたことはありませんでした。

数カ月あるいは2年くらいなら、こ

のような扱いを受けても我慢できるでしょう。私の場合は、周囲の人との交際が大きな意味を持つ思春期に、4年間もこのような状況の中にいたのです。私は、友達もなく、自分を落伍者のように感じました。それはとても寂しい時期でした。

私が16歳のとき、家族で新しい土地へ引っ越しました。これで私はすべての悩みから解放されるだろうと思っていましたが現実には反対でした。新しい環境の中で、私は自分がのけ者のような気がしました。私は自分にすっかり自信をなくしていたので、自分を好きになってくれる人などだれもいないだろうと思ったのです。私は、このような惨めな気持ちにさせた以前のあの少女たちを憎みました。つきまとう過去の自分をひきずったまま私はどうすれば「やり直し」ができるだろうかと思案に暮れていました。

ひどい孤独感や心の痛みに悩まされ、人との交際に飢えて、自分のなすべきことを自問しました。すると、「あなたの敵のために祈りなさい」という昔から言われてきた、あの言葉が心に浮かんできたのです。

私の自尊心も、希望も、友達との関係もめっちゃめっちゃにしたあの少女たちのために祈る？ そんなこと絶対できない。私はそう思いました。

しかし私は、みたまが祈るように告げているのを感じました。

私は、以前のように成長し自信を取り戻すには、彼女たちを赦さなければならぬことはわかっていました。ひざまずき、いつものように祈り始めましたが、次の瞬間それをやめてしまいました。彼女たちのために祈れなかったのです。どうしても祈れませんでした。私はひざまずいたまま30分ほど泣き続けました。そして、今度は主に力を求めながらこう祈りました。「天のお父様、キャシー、アン、シェリー、ジュリーをどうぞ祝福してください。」私が言ったのはそれだけでした。何の



変化も感じられませんでした。それは私が捧げた祈りの中で最も辛い祈りでした。それでも次の日の夜も同じように祈りました。

毎晩彼女たちのことを祈るようになって2、3カ月が過ぎると、驚くべきことが起こり始めました。祈りの言葉が前よりすらすら出てきて、自分に対してもっと良い気持ちを感じ始めていました。私は、一人一人の少女のために特別な祈りを捧げました。「アンがダンスのレッスンで上達できるように祝福してください。ジュリーが両親とうまくやってくれるよう祝福してください。キャシーが正しいことを行なう勇気を持てるよう祝福してください。シェリーに力が注がれて、目標を達成できるように祝福してください。」

祈りを続けて丸1年が過ぎたころ、信じられないようなことが起こりました。私は彼女たちを愛するようになり、苦々しい感情やよくない思い出は消えてしまったのです。今では私たちは良い友達になっています。

家族で引っ越してから3年がたちましたが、いまだに私は彼女たちのために祈る時間を取っています。彼女たちのために祈り、赦すことを決めたあの晩の決意は、おそらく今までの中で一番重要な決断だったと思います。私は自分のこれまでの生活を怒りと心の傷を残したままで過ごすこともできました。そして最終的には、自分の人生を台無しにしていたかもしれません。

私はこの祈りを通して、自尊心を取り戻すことができました。また、信仰の意味、祈りの力、聖典が真実であるということ学びました。今では、自分を愛してくれるたくさんの友達に恵まれています。もう良心の呵責を感じることもありません。今では私を傷つけた人のためにひざまずいて祈ることが、私の習慣となっています。私は人を赦す心地良さを知りました。□

A black and white photograph showing a hand holding a soccer ball. The ball is a classic black and white patterned ball with the brand name 'Molten' and 'Official size weight' visible. The hand is positioned at the bottom right of the frame, reaching up towards the ball. The background is plain white.

# ある ゴールキーパーの場合

リーザ・A・ジョンソン

「い

いかげんにしてよ、ジョーディー。たった1回じゃないの。今度の日曜日だけ試合に出場したくらいで、神様に嫌われたりしないわよ。」

「そのとおりだわ。」チームの先発ゴールキーパー、ユタ州サンディー出身の17歳のジョーディー・アレンはそう思いました。「たった1回だけじゃない。」でも、その試合に出場するという事は、何年も前に天父と個人的に交わした約束を破ることを意味していました。

でもジョーディーは、出場を勧めるチームの仲間たちにどう説明すればいいのでしょうか。シーズン中チームが一丸となって一生懸命練習に励み、ユタ州選手権大会に優勝し、地区大会のためにカリフォルニア州サンフランシスコまで遠征して西部地区各州の代表チームと戦ってきました。そして2回戦まで勝ち進み、昨年勝てなかったチームと対戦する機会が再び巡ってきたのです。チームの皆は雪辱を願っていました。この試合に勝てば地区大会の決勝進出が決まるからです。

しかし、試合は日曜日に予定されていました。

「ジョーディー。一体、自分を何様だと思っているの。教会員はほかにもいるけれど、みんな日曜日の試合に出場するつもりよ。あなたは、私たちよりも偉いとでも言うの。」

しかし、理由はそんなことではありませんでした。ジョーディーは高校に入学してサッカーチームに入ったとき、日曜日には絶対サッカーをしないと主に約束し、最善を尽くせるよう主の助けを願い求めたからだったのです。そして、主は、ジョーディーが期待していた以上に

様々な方法で助けてくださいました。ジョーディーは主との約束を守ったので、たくさんの伝道の機会に恵まれました。

ジョーディーはこう語ります。「あるサッカーの試合で、なぜ私が日曜日に試合に出ないのかを知りたがっている別の州の選手に会いました。それは、その男性に福音について話す良いきっかけとなりました。試合の後、私たちは手紙のやりとりをするようになり、彼にモルモン経を送りました。彼がどう受けとめるかわからなかったのですが、彼はモルモン経を読み、福音についてもっと知りたいと言ってくれました。そこで、私は教会のパンフレットをいくつか送りました。しばらくして、彼はバプテスマを受ける決心をしました。」

また、サッカーの試合に行くバスの中でのことでした。(男女両チームがそのバスには乗っていません)私はモルモン経を読んでいました。私が手にしていたのは四大聖典の大きな合本で、それは少し目立ちました。ユタに住んでいたことのあるひとりの男の子が、今までに1度もモルモン経を見たことがないと言って、見たがりました。彼はモルモン経に少し目を通すと、質問してきました。間もなく、バスの中の後方に座っている人が皆、モルモン経についての話し合いに加わってきました。まるで、バスの前列と後列の間にカーテンが引かれているようでした。というのも、前の方では、良くない冗談を言い合っていたからです。」

ジョーディーはサッカーのユニフォームと一緒にいつもモルモン経を1冊余分にカバンに入れ、持ち歩いてい

ジョーディーは、日曜日にはサッカーをしないことを主と約束していました。しかし、今、選手権大会を前にして、大切な決断を迫られていました。



ます。こうして今までに、たくさんのモルモン経を配りました。

ジョーディーは、自分のプレーに対する称賛に感謝していますが、「福音に従った生活」について評価される方により大きな喜びを感じています。

ですから、たとえ今回のような大きな大会を前にしても、日曜日にサッカーをしないというジョーディーの決



意は変わりませんでした。しかし、チームの仲間がそれを理解してもらおうとなると、話は別です。

ジョーディーはその気持ちを次のように説明しました。「もし、日曜日に試合に出なければ、チームの皆を失望させてしまうし、私も後ろめたさを感じるわ。でも、もし試合に出たら、もっとたくさんの人を失望させてしまうことになるのよ。まず、約束を破ることになるから、自分自身に失望してしまうでしょう。両親も失望するでしょう。主との約束が、私にとってどんなに大切かを知っているから。いとものがっかりするわ。彼は私に倣って日曜日には試合に出ないと言っているんですもの。そして、安息日を破らないことを教えてくれたセミナーの先生も失望させてしまうわ。でも、一番大切なのは、神様を失望させてしまうということ。それだけは、絶対にできないわ。」

ジョーディーの必死の説明も、仲間たちにはあまり理解してもらえませんでした。土曜日の晩ずっと、チームの仲間たちはジョーディーに試合に出場するよう説得し、ジョーディーをからかったり、思いつく限りの侮辱を彼女に浴びせました。とうとう、ジョーディーは夜中に泣きながら家に電話を入れました。自分の決心を曲げそうになったからではありません。ひどく孤独感に悩まされたからです。

両親は、ジョーディーの話に耳を傾け、ジョーディーの気持ちを理解してくれました。父親も母親も電話口で、一緒に祈ってくれました。電話を切った後、両親は、サンフランシスコの近くに住む昔の友人に、ジョーディーを助けられるように頼みました。

翌朝、ジョーディーは起きて、洋服に着替えました。それはスタンドの観客に交じって、試合を観戦するための洋服でした。試合は結局1対1の引き分けとなりました。ゲーム終了後、チームの仲間の多くはジョーディーにひどい言い方をしたことを謝りました。

ジョーディーのチームは第3位となり、過去最高の成績を収めました。ジョーディーは、これが引退の潮時だと思いました。

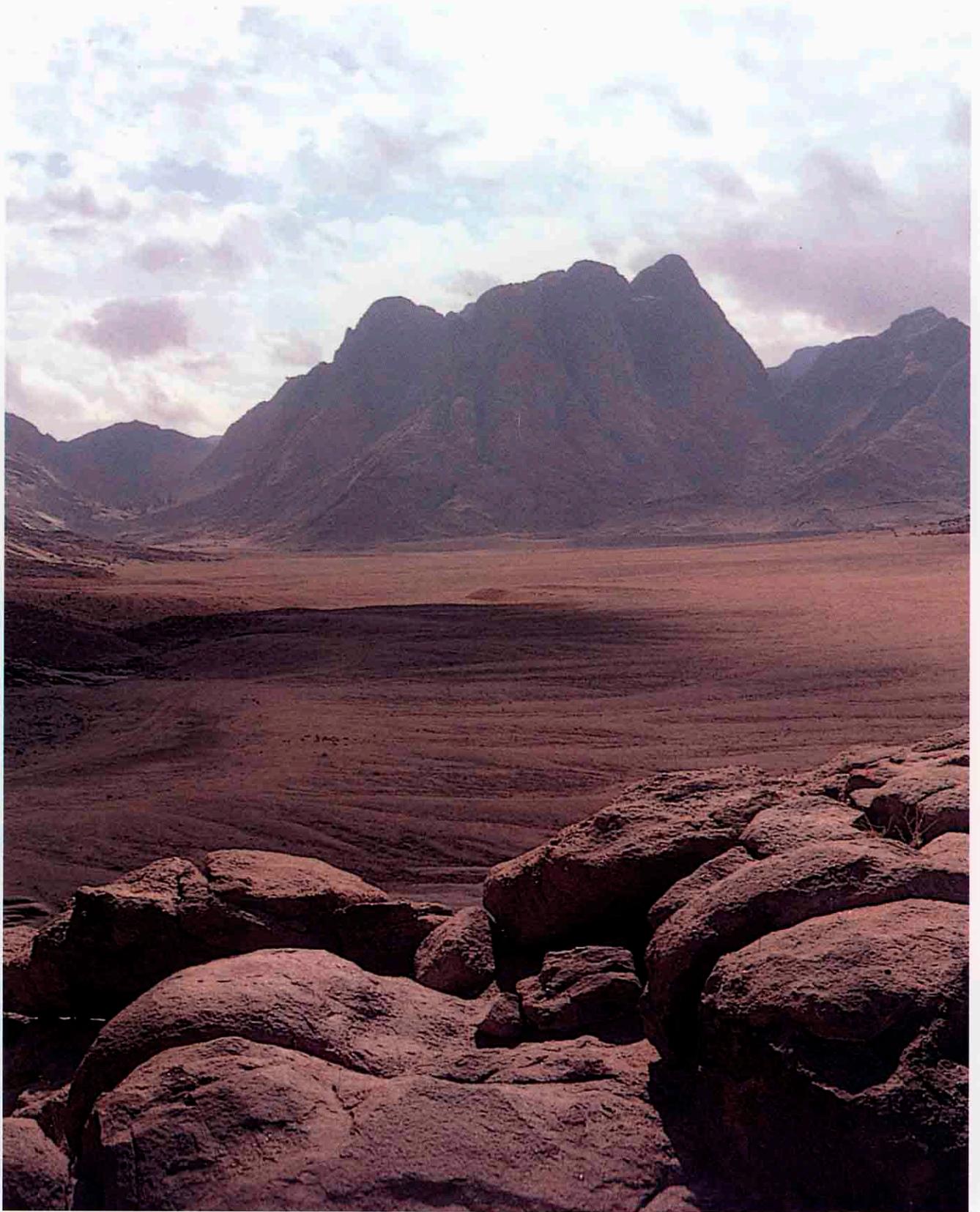
「サッカーに関して言えば、自分の望みはほとんど達成しました」とジョーディーは語ります。ジョーディーは、ユタ州でゴールキーパーの

最優秀選手として認められ、多くの大学から引き抜きの声がかかっていました。しかし、日曜日の試合には出ないというジョーディーの方針を聞くと、それ以上は関心を示さなくなりました。「今は、もっとほかの才能を伸ばしたいんです。音楽とか演劇とか。それに、セミナーの評議員の責任もあるので、結構忙しいんです」とジョーディーは言っています。

ですからジョーディーの高校生活最後の年は、長年すべてを打ち込んできたサッカーというスポーツがジョーディーの生活の中から消えても、やはり忙しいものとなるでしょう。サッカーに対する未練はそれほどないでしょうし、これまでサッカーを通して学んだ教訓は、これからの人生においても大きな助けとなるだろうとジョーディーは考えています。

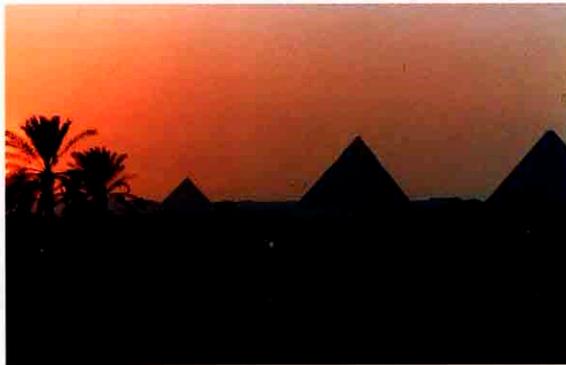
「『すべての事には季節があ〔る〕』と伝道の書3章1節には記されていますが、私のサッカーの季節は終わったのだと思います。後悔はありません。サッカーのおかげで、いろいろな伝道の機会に恵まれました。主は私を祝福してくださり、また、私を通してほかの人々を祝福されました。いつでも報いがありました。卑しめられたり、押しつけられたりして、いろいろな目に遭いました。でも、それら乗り越えられるということがわかりました。主は私を信頼してくださっています。私も自分に自信が持てました。」ジョーディーはそう語ります。

ジョーディーは、ただ1度のサッカーの試合と引き換えに、これらのすべてを失うことはありませんでした。ジョーディーはそれを知って、今、大きな幸福感を味わっています。□



### シナイ山と黄金の子牛を祭った荒野

伝承によればモーセが山に登って主と語っている間に、イスラエルの民はこの荒れ果てた地に宿営していたとされている。モーセのいない間に、人々は偶像崇拝に陥り、アロンに黄金の子牛を造らせて、それを礼拝した。(写真撮影リチャード・クリーブ。許可を得て掲載)



**古**代都市ペトラは、死海から80キロほど南の現在のヨルダン王国にあった。その歴史は古く旧約聖書の時代にまでさかのぼる。長年にわたって様々な家屋や建造物が、赤い砂岩のがけを彫って造られてきた。ここに見える、15メートルもあるコリント式の円柱を持った美しい宝庫も、そのひとつである。

エジプトのギーザにある3つのピラミッドは、救い主の誕生から2,700年も前に造営された。この中で最大のクフ王のピラミッドは、古代世界の七不思議のひとつに数えられている。(「聖書の地理」p.34参照)



# 神の聖なる神権

アジア地域会長会会長  
ダグラス・H・スミス



**主**のみ業は神権の指示の下に行なわれ、神権の力によって推し進められます。ジョセフ・F・スミス大管長は次のように述べています。「神権とは、人に委任された神の力であって、それ以上のものでも、それ以下のものでもない。人が天父と御子と聖霊のみ名によって、人の救いのため地上で正当に行動することができるのはこの神権によるのである。これは神権を持っているように見せかけているのでもないし、死んだ過去の世代から借りているのでもない。この神権は、私たちが住んでいるこの時代に天から、全

能の神の御前から直接み使いや霊が訪れて与えたのである。」（「福音の教義」p.136）

聖なる神権の権能は、すでにその権能を受けた人を通して、神から委任されなければなりません。天から与えられたこの権能によってこそ、儀式を正しく行なうことができるのです。神権の系統は途切れることなくイエス・キリストにたどり着くものであり、神権の職に聖任される人は、皆、直接イエス・キリストから聖任されるのと同じなのです。教会の信仰簡条第5条には次のように記されています。

「われらは、福音を宣べ、且つその儀式を執り行うためには、啓示と、権威ある者の按手により、神によりて其任に召されねばならぬことを信ず。」

このように、権威ある者が啓示のみたまと靈感によってふさわしい兄弟たちの頭に手を置き、イエス・キリストのみ名と神権の権能によって、彼らに聖なる神権を授け、聖任するのです。

私たちは教義と聖約の中から、神権の権能を授けられる人が果たすべき義務と責任を知ることができます。84章33—40節には神権の神聖さと、その重要な構成要素である誓詞と誓約が記されています。

「およそ忠実にしてわが今語れる二

つの神権を得、而してその天よりの召を全力を尽して遂行する者たちは、『みたま』により聖められてその肉体再新さる。これらの者はモーセの息子たちとなり、アロンの息子たちとなり、アブラハムの子孫となり、また教会員にして王国の民となり神の選民となる。主は言う、またすべてこの神権を受け入る者は、われを受くるなり。そは、わが僕らを受け入る者はわれを受くればなり。また、われを受け入る者はわが父を受くるなり。而して、わが父を受け入る者はわが父の王国を受くるなり。この故にわが父のもてるすべては彼に与えらるべし。而してこは神権に属ける誓詞と誓約によりて然るなり。この故にこの神権を受くる者は、すべてわが父のこの誓詞と誓約を受け、而してこれをわが父は破ることも変えることも為したもうはずなし。」

教会にはふたつの神権があります。メルキゼデク神権と、レビ神権とも呼ばれるアロン神権です。メルキゼデク神権は、教会内のすべての職を管理する権威と権能を有する管理の鍵を持ち、霊にかかわる様々な事柄を取り扱います。（教義と聖約107：8参照）その中には、王国の奥義、ならびに神の知識の鍵も含まれています。したがって、神権の権能をもって行なわれる儀式な

くしては、肉体を持った人間に神の力が表われることはありません。(教義と聖約84:19-21参照)

さらに私たちは、神権の職と召しと定員会の区別を理解しておく必要があります。メルキゼデク神権の職には次のようなものがあります。

長老一常任教職者。

七十人一巡回福音伝道者。

大祭司一霊につける事柄を管理し、執り行なう者。

祝福師一教会員に祝福を結び固める者。

使徒一巡回管理高等評議員、全世界におけるイエス・キリストのみ名の特別な証人。

大神権の大管長会一神権の一切の職務を行なう権能を持つ。

アロン神権には次の4つの職があります。

執事一教会を見守る常任教職者。

教師一常に教会員を見守り、共にあって彼らを強める。

祭司一説き、教え、<sup>せいさん</sup>積み、勧め、バプテスマを施し、聖餐式を執り行ない、各会員の家庭を訪れる。

監督一アロン神権を管理し、世俗的な事柄を処理する。

メルキゼデク神権とアロン神権のいずれの職も聖任という方法により授けられます。アロン神権の職を受けるのにふさわしい男性はまず最初にこの神権を授与され、アロン神権者となります。それ以降、アロン神権の職を受けられるときには聖任を受けますが、アロン神権そのものはすでに授けられているので、これを受け直す必要はありません。

同じように、メルキゼデク神権の職を受ける男性は最初にこの神権を授与されると、メルキゼデク神権者となります。そしてこれ以降、メルキゼデク神権のどの職を授けられる場合でも聖任を受けますが、メルキゼデク神権そのものを受け直す必要はありません。

神権の召しは任命によって行なわれ、聖任とは異なります。このような召しには、地区代表、ステーク部長、副ステーク部長、監督会、定員会の役員、補助組織の役員、教師、そのほかの特別な召しがあげられますが、これだけに限りません。

メルキゼデク神権の定員会は次のとおりです。

長老定員会一常任教職者の組織。

七十人定員会一巡回長老の組織。

大祭司定員会一ステーク部内のすべての大祭司が所属する。ステーク部長ならびに副ステーク部長がこの定員会の会長会を構成する。

十二使徒定員会一使徒として聖任され、同定員会の一員として支持を受けた教会幹部により構成される。

大管長会一教会の大管長、ならびにふたりの副管長によって構成される。

聖任によって授けられた神権の職は、ふさわしくある限り、永久にその職を授けられた男性のもとにとどまります。宗紀上の問題を協議するために開かれる教会の各種の評議会で公式の処置を受ける場合を除き、取り去られることはありません。

家庭は教会の<sup>いしづえ</sup>礎です。家庭と家族は正しい生活を送るための永遠の単位です。ふさわしい神権指導者ならびに家族の父親は、まず第一に家庭の中でこそ、神権者としての務めをよく果たさなくてはなりません。みずからの神権を用いて妻と子供たちを祝福し、模範によって家族を正しく導ける場所は、家庭をおいてほかにないのです。

父親が神権を持っているにもかかわらずふさわしくない場合、この父親に働きかけて、強めるのはホームティーチャーの務めです。家庭の中に神権者がいない場合には、ホームティーチャーがその家族のもとに神権の祝福を携えて行き、家庭を祝福します。神権は家族に幸福と喜びをもたらすためにあるのです。神権の祝福は、それを願い求める信仰を持った人々に授けられます。神権を持つ父親のみずからの神権を行使して、定期的特別な祝福を授け、それによって妻や子供たちに豊かな祝福をもたらすのです。家族が病気のときに神権の儀式を行えば、癒しと慰めが得られ、ほかの方法では到底得られない一体感が生まれます。

神権の儀式の中には、主の宮居の中でしか行なわれない神聖なものがあります。神権者もふさわしい姉妹も、各自、正しい生活を送り主の戒めを守ってみずからを備え、神殿に参入して正

しい礼拝を通して授けられる賜を受ける必要があります。そうすることによって、私たちは神の最大の賜である永遠の生命を受ける機会にあずかるのです。

主の助けを得て私たちすべてが聖なる神権の権威と権能、そして神権が与えてくれる数々の賜を理解できるように、また、神権の誓約を交わしそれを守るにふさわしい生活を送れるようにお祈りいたします。

ブルース・R・マッコンキー長老は以下のような助言を与えています。

1. 神権とは、人類の救いのためにすべてのことを行なうように地上の人間に託された神の権威、権能である。

2. 「われらは、福音を宣べ、且つその儀式を執り行うためには、啓示と、権威ある者の按手により、神によりて其任に召されねばならぬことを信ず。」

3. 神権は授与されるものである。たとえば「あなたにメルキゼデク神権を授けます」と言う。

4. 神権の職は聖任によって授けられる。たとえば「メルキゼデク神権の長老の職にあなたを聖任します」と言う。

5. 管理上の責任は任命によって与えられる。たとえば「ソルトレークステーク部のステーク部長にあなたを任命します」と言う。

6. 鍵は管理する長たる者としての責任に任命されるとき与えられる。神権の職に聖任される男性は権利や権能を授けられても、鍵は受けない。

7. 長たる者を助けるいわゆる「副」の立場にある人々に鍵は与えられない。これらの人々は管理者の一員ではあっても、長たる者への助言者としての務めを果たす。高等評議員にも鍵は授けられない。高等評議員の責任は教え導くことにあり、管理者としての責任は与えられていない。

8. 聖任と任命はキリストのみ名と神権の権能により、按手をもって個別に行なわれる。

9. 祝福を授けるときはみたまの導きを求める。

# 私の改宗談

アムダー・ビェンヴォン長老

**私**が初めてこの教会を知ったのは、家のそばで伝道していたふたりの姉妹宣教師に会った時でした。私はふたりがなぜやって来たのか不思議に思い、いくつか質問をしているうちに、宣教師の言うことに興味を持ったのです。姉妹宣教師たちは長老たちに私を訪問するように伝え、翌日にはもう長老たちが私の家へ来てくれました。私が17歳の時でした。

最初に興味を覚えたのは、宣教師が外国人だということでした。彼らはタイ語を話したので、理解するのは容易でしたし、私は外国人と友達にならなかったのです。

1週間ほどレッスンを受けました。私はそれまで教会について聞いたことはありませんでした。宣教師からレッスンを受けるのは初めてだったのです。最初は彼らのことをプロテスタントだと思いました。キリスト教会はたくさん見たことがあったからです。

1週間でレッスンを7課終えました。その時私は宣教師がとても責任感が強く、誠実なのに感心しました。一番心に残ったのは、彼らが決して約束を破らないということでした。

私はコーンケーンという所で家族と一緒に住んでいました。家族はだれもレッスンに加わりませんでしたが、特に反対したり批判したりすることはありませんでした。長老たちは私に祈ることと、聖典の勉強をすることを教えてくれました。私は言われたことに従い、バプテスマを受けようと思いました。それから2カ月もしないうちに、私はバプテスマを受けることになりました。天父に祈り、助けを求めたので、私は数々の祝福を受けました。

私の家族はだれもバプテスマ会に来してくれませんでした。当時、私は家族の中でただひとりの会員でしたが、家族は私が伝道に出ることについて、何

も反対しませんでした。自分が正しいと思うことなら何でもやるようにという考えでした。ですから、宣教師になることに何も問題はなかったのです。

私の生活はずいぶん大きく変わりました。それまで私は怒りっぽく、人の言うことに耳を貸そうとはしませんでした。お酒が好きで、ナイトクラブやバーによく足を向けたものです。でも、今はもう、そうした生活が好きではありません。このようなことが実際に起こるのです。私は弟にも教会へ行くように勧め、弟もよい気持ちを感じてくれました。

私は宣教師の規則をすべてよく守り、最善を尽くしてすべての人に良い模範を示そうと努めました。この教会は地上で唯一の真の教会であり、イエス・キリストは私たちの救い主であり、今も生きておられます。ジョセフ・スミスは神の予言者です。私の人生で最も大切なこの教会を私は心から愛しています。この福音は真実です。

伝道期間中に私は家に帰り、徴兵のための審査を受けることになりました。タイでは21歳以上の大方の男子は兵役に就くことになっているのです。コーンケーンへ行く前に、主に仕える業をやめなくても済むように、何度も神に祈りました。私はとても不安でしたが、

ウィード伝道部長に話すと、兵役に就かなくても済むだろうと約束してくれました。気持ちが少し楽になり、神に対する信頼感が増しました。恐れや不安を感じると、いつもこのような声が聞こえます。「恐れてはならない。神を信頼しなくてはならない。」このような気持ちを抱きながら、1986年4月8日、コーンケーンに着きました。私たちが伝道していたチェンライという所から、同僚だった長老が付き添って来てくれました。その間、ずっと私は天父に祈っていました。

翌日、私は家族に再会しました。家族は皆教会員ではありませんでしたが、徴兵のことについて父に話すと、父も兵役に就いてほしくないという気持ちでした。父は、政府にお金を払って行かなくても済むようにしてあげようと言ってくれましたが、私は、それはほしくないと言いました。なぜなら、父のお金を使ってそのようなことをすれば、私は神を信頼していないことになるからです。

翌朝、私はアンパーと呼ばれる場所へ行きました。身体検査など規定の検査が済むと、徴兵カードをくじ引きすることになっています。列に並んで順番を待っている間、何度も神に祈りました。そして、とうとう望みどおり、兵役免除のカードを引くことができたのです。

神を信じるならば、必ずすべては良い方へ向かいます。確かに神は生きておられます。もし私たちが神を信ずるならば、大いなる祝福を受けることができるのです。

## 主との約束

リン チャン ミン  
林 城 明

**教**義と聖約82章10節には、このように記されています。「汝らわが言うところを行わば、主なるわれこれに対して責任あり。されど、汝らわが言うところを行わずば汝ら何ら約束を受けず。」私も同僚も、神はご自分を信じる者を助けてくださることを固く

信じており、決してご自分の約束を破られることはないと思っています。そこで、6月には5人のバプテスマを行なうというチャレンジに挑戦すると主に約束したのです。

ひと月に5人のバプテスマを行なうというのは非常にむずかしいことです。

そこで、私たちは深く自己反省して、慎重な計画を立てました。私たちの計算では、5人にバプテスマを施すには、20人の求道者にレッスンをし、そのうちの少なくとも10人にバプテスマをチャレンジし、毎日3人の新しい求道者を見つける必要がありました。そして、私たちがバプテスマを施す動機は、人々が真理を見だし、救いを得ることであると、へりくだって主に申しあげたのです。まず、次のような具体的な日々の目標を設定しました。モルモン経を5冊配布する、10人に街頭伝道する、毎週ふたりの求道者にバプテスマをチャレンジする、などです。そして、この目標を書き留め、私たちの決意を示すためにふたりの署名を入れました。こうして私たちは伝道を進めました。

6月になり、またたく間に日々は過ぎていきました。私たちは一生懸命働き、2週目までにふたりにバプテスマを施し、3週目にもうひとりバプテスマを施しました。目標達成までには、あとふたりです。私たちはさらに熱心に働き、私たちの求道者の中のふたりが強い信仰を持ってバプテスマを受けられるように、よく祈りました。しかし、サタンは私たちの願いを知っており、目標達成を妨げようとあらゆる手を尽くし始めたのです。バプテスマを予定していたふたりのうち、ひとりにはバプテスマ会に姿を現わしませんでした。連絡を取ることもできず、私たちは失望し、悲しくなりました。4週目が過ぎても、目標はまだ達成されていないのです。

同僚と私は互いに顔を見合わせました。私たちは世界中で最も不幸な人間であるかのように思われました。あと一歩で目標達成だというのに。どうしてもこのような思いが心の中に起きてしまうのです。「私たちは自分のやるべきことをしていないから、主は私たちの願いをかなえてくださらないのだろうか。」

私たちの心は沈んでいましたが、なぜか、主は私たちにはわからない方法で道を備えてくださるに違いないと感じました。そこで、計画どおりに伝道続けることにしました。モルモン経

を配布し、人々に会い、紹介された人を訪問しました。

6月29日に、私たちはワード部の家庭の夕べに出席しました。会員たちが集まり始めたとき、突然、ある人に私たちの目が留まりました。それは求道者のひとりで、私たちの話は聞くけれどもバプテスマを受けようとはしないアンピエンさんでした。私も同僚も、とっさに思いつきました。「彼女こそ、今月バプテスマを受ける最後の人だ。」バプテスマの可能性はあまりないようにも思いましたが、とにかくやってみようと考えた私たちは、彼女に話しかけました。でも、バプテスマのことに触れると、彼女は首を振るばかりでした。

よい返事はもらえませんでした。が、「信ずる者には、どんな事でもできる」というマルコ9章23節の聖句を思い浮かべ、同僚に次のように言いました。

「信仰を表わさなくてはなりません。私たちはできる限りのことをしてきました。主もそれをご存じです。私たちの祈りの答えは、彼女しかいません。」そこで、家庭の夕べが終わった後、もう一度話してみることにしました。

けれども、答えは変わりませんでした。私たちがあきらめようとした瞬間、数人の姉妹たちが近寄ってきて彼女に話しかけました。そのとき私は、みたまが彼女の心を和らげるように働きかけているのを感じました。アンピエンさんはしばらく考え込んでから、こう言いました。「バプテスマ会はいつあるのですか。」その言葉は、私たちの心を揺さぶる雷のようでした。間髪を入れず私は答えました。「いつでもできます。」

私たちの立てた6月の目標を達成するには、あと1日しか残っていませんでした。そこで、彼女のバプテスマを6月30日に決めました。

私も同僚もこの経験に心から感謝しています。この経験を通して、私たちは証を強め、信仰を保つことの大切さを学びました。失望したときに、もしあきらめてしまっていたら、決して目標を達成することはできなかつたでしょう。(キャロライン・カク姉妹による聞き書き)

## 地区代表変更のお知らせ

神崎良太郎長老の解任に伴い、新たに新山靖雄長老が地区代表として召されました。担当地区は、広島、岡山、高松、福岡、沖縄地区です。

## 新役員の任命

1990年6月16日から1990年7月19日まで管理本部会員統計記録課に通知のあった役員の異動(敬称略)

- 横浜ステークキ部大船ワード部  
新監督：佐倉井正彦  
(前任者：小山清)
- 大阪ステークキ部天満橋支部  
新支部長：熊野均  
(前任者：上杉賢)
- 大阪ステークキ部飛鳥支部  
新支部長：服部教祐  
(前任者：三木勉)
- 広島ステークキ部高須ワード部  
新監督：打越政博  
(前任者：澤正浩)
- 新潟地方部長岡支部  
新支部長：赤沢良一  
(前任者：野本洋一)
- 札幌ステークキ部滝川支部  
新支部長：遠藤功  
(前任者：本間吉雄)
- 東京ステークキ部吉祥寺ワード部  
新監督：高橋精一  
(前任者：小沼政弘)
- 青森地方部大館支部  
新支部長：土門一元  
(前任者：武蔵野聖徒)
- 三重地方部津支部  
新支部長：DeMar Taylor  
(前任者：藤谷繁樹)
- 札幌ステークキ部  
新ステークキ部長：鮫島邦彦  
(前任者：西田孝雄)
- 東京西ステークキ部  
新ステークキ部長：品川文弘  
(前任者：宮脇荘司)

## 再組織された町田ステークス部長会

去る5月27日に開かれた町田ステークス部大会で、1982年3月からステークス部長の責任を果たしてこられた森村久男兄弟が解任され、新たに柏倉仁兄弟(写真中央)が召されました。第一副ステークス部長、第二副ステークス部長には、引き続き坂井圭兄弟(写真右)と赤塚周兄弟(写真左)が召され、その任に当たります。



柏倉仁兄弟とご家族

「心をつくして  
主に信頼せよ」

町田ステークス部  
ステークス部長  
柏倉仁

このたびの召しを謹んでお受けでき感謝しております。私はいつも召しは解任されるのを楽しみに奉仕してきました。私の家族(子供6人)も同じだったと思います。教会ではどの召しも神様からのものですから、心から喜んで奉仕すべきであると理解しておりますが、実際には責任の重大さに押しつぶされそうな気持ちで、とても喜んでと言えるものではなかったと思っております。これからも主に導きを求めて奉仕したいと思っております。

さて聖典の中に「心をつくして主に信頼せよ、自分の知識にたよってはならない」(箴言3:5)とあります。この召しは多くの教会員の皆様に影響を与えますので、主に頼って導きを得る

ことが大切でありますし、現在の世界情勢を見聞きするたびに主の福音の原則を中心とした自由がどれほど大切なものであるかよく理解できます。したがって会員の皆様の自由を尊重しつつ、福音の原則の大切さを教導したいと考えております。私はジョセフ・スミス

が神様とイエス・キリスト様にお会いして末日聖徒イエス・キリスト教会を回復してくださいましたことを証します。また神様が実に生きたもうことを証します。(かしくら・ひとし 1939年生まれ)

## 新教会堂の紹介

## 大阪堺ステークス部泉佐野支部

(1990年5月10日完成)

敷地面積：774.58㎡

建築面積：285.0㎡

延床面積：283.0125㎡



所在地：大阪府泉南郡阪南町和泉鳥取1133-4 ☎0724-71-9763

# 「これ皆汝に善からんため」

東京東ステーキ部牛久ワード部

松岡正伸

**昨**年の3月7日、徳島県美馬郡貞光町で、長男の伸矢が行方不明になり、1年以上経過した現在もまだ見つかっていません。多くの兄弟姉妹の皆様から、信仰の祈り、献身的なご協力、温かい励ましをいただき、心から感謝しています。ありがとうございます。

当初は、山で迷子になっているのではないかと思い、山間部で大がかりな捜索をしました。警察の方や、地元の方々、四国の教会員の方々、それに警察犬も加わって、3カ月間にわたって野山、川、町など、考えられるありとあらゆる所をくまなく捜しましたが、伸矢を見つけることはできませんでした。特に地元貞光町の皆さんは、親切に捜してくださいました。広報車が伸矢の行方不明を知らせると、たくさんの方が寒い夜の町に出て夜更けまで捜してくださいました。子供が行きそうな所、迷子になりそうな所、危険な所など、皆さんがそれぞれ思い当たる

場所を率先して、捜してくださいました。翌日からは、わざわざ仕事を休んでまで捜索隊に加わってくださった方々もいました。私が連日捜し歩いているのを見かけると、声をかけて励ましてくださる方もいました。中には私を呼び止めて、「ちょっとうちで休んで、お茶でも飲んでいきなさい」とやさしく招いてくださった方々もいました。外来者である私たちに、こんなにまでしてくださる見ず知らずの方々に、私はたびたび感動し、感謝の涙を流しました。

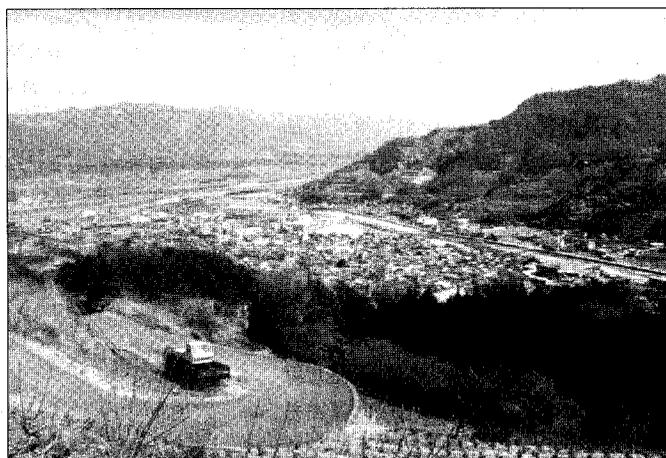
それでもなかなか見つからず、何かの事件に巻き込まれたのではないかも考えました。しかし警察の方では目撃者もないことから、「事件性はなく、迷子」という見解を採っています。発見できない日が重なりますと、失望と悲しみが深くなり、耐えられない時が訪れました。しかし一方では、「これだけ捜しても見つからないということは、どこか別の所で生きているに違いな

い」という希望も芽生えてきました。

私は伸矢は必ず生きていて、だれかに連れられたのだと確信しています。たくさんの方々のご協力により、徳島県内を中心に尋ね人のポスターも張り上げました。新聞、テレビもこの事件を採り上げて、報道してくれました。しかし事件が報道されたことにより、いたずら電話や、宗教の勧誘の電話をかけてくる人もいました。

この4月13日は、伸矢が6歳になる誕生日でしたので、新聞、テレビが再び報道してくれました。その結果、今までは一度もなかったことなのですが、「伸矢によく似た子供を見た」という情報が2件寄せられました。急いでその追跡調査を試みましたが、まだこれといった進展は見られません。しかし私は、息子が「無事に生きている」という可能性を強く信じています。

この1年余りの歳月は、悪い夢でも見ているような毎日でした。家族で徳島に帰省することになったのは、昨年



▲徳島県美馬郡貞光町

◀松岡伸矢くん(左)と姉の沙織ちゃん(右)

の3月4日に亡くなった妻の母の葬儀のためでした。当時、私は転職したばかりでした。それまで多忙をきわめた職場から、もっと家族のために時間を取らねばならないと思い、仕事を変えたのです。

3月4日、妻は団体参入で神殿に入り、家族一人一人について祈りを捧げてきました。その日の夕方、妻の母は亡くなりました。3月7日の妻の誕生日を前にして、葬儀に出席するために四国へ向かう列車の中で、母親思いの伸矢はこのように言いました。「お母さんの誕生日には、ケーキを買って食べようね。プレゼントには、ほくが押し花を作ってあげるよ。」また妻が火葬場で悲しんでいたときには、「お母さん泣かないで。復活したらまた会えるから」と言っていました。当時まだ4歳の幼い息子でしたが、しばしば純粹な信仰とやさしさが、ときには忍耐と勇気が見られました。その伸矢が、葬儀の翌日なくなったのです。

それからはもう無我夢中の1年間でした。昨年11月、妻は予定より3カ月も早く、4人目の子供を帝王切開で出産しました。1,188グラムの超未熟児で、しかも感染症にかかっていたので、無事育つかどうかとても心配で、夜も眠れませんでした。その後肺炎を併発しましたが、お医者さんと看護婦さんたちの献身的な看護と、主のみ恵みを受けて成長し、2月末には2,500グラムまで体重も増えて退院することができました。これは私たち家族にとって、ひとつの奇跡でした。私たちはこの子に、真弓という名前をつけました。この名前には、目的を達成した矢が、再び、弓のところへ戻ってくるよという願いが込められています。真弓が、我が家に帰ってこれたので、近い将来必ず伸矢もまた帰ってくることができると信じています。

聖典の中でアルマは、「信仰とは……まだ見ていない本当のことを待ち望む」ことである(アルマ32:21)と語っています。また教義と聖約には「多くの苦悩の後に祝福は来るなり」(103:12)、「汝の不幸、汝の困苦はただこれ東の間なり」(121:7)、「わが子よ汝この事を知れ、すなわちこれ皆

汝に善からんため、汝に経験を与えんためのもなり」(122:7)と書かれています。私には、ジョセフ・スミスが受けた言葉の一つ一つが、我が事のように身近に感じられます。またエジプトに売られたヨセフと父親であるヤコブの気持ちが、手に取るようにわかります。アブラハムもヤコブも、息子を通して大きな試しを受けましたが、彼らは信仰によって耐え、大きな祝福を得ています。私たちも信仰を固く保ち、つぶやかず、最後まで忠実でありたいと思っています。

「その上、肉親の父はわたしたちを訓練するのに、なお彼をうやまうとすれば、なおさら、わたしたちは、たま

しいの父に服従して、真に生きるべきではないか。肉親の父は、しばらくの間、自分の考えに従って訓練を与えるが、たましいの父は、わたしたちの益のため、そのきよさにあずからせるために、そうされるのである。すべての訓練は、当座は、喜ばしいものとは思われず、むしろ悲しいものと思われる。しかし後になれば、それによって鍛えられる者に、平安な義の実を結ばせるようになる。」(ヘブル12:9-11)

兄弟姉妹の助けに、心から感謝しています。神様は私たちに訓練と祝福を与えてくださっていることを証します。(まつおか・まさのぶ 1957年生まれ、神権会教師)

## 90歳の喜び

青森地方部三沢支部  
吉田よね



**私**は85歳でこの教会の会員になりました。それまで私はろく膜と背の崩れる病気のため、10年もの間入院していました。しかしある日、院長先生に「あなたにあげる薬はもうないから家へ帰って養生してください」と言われ、病院を出ました。家に帰っても背は曲がり、満足に歩くこともできずにただこたつに座り、死を見つめるばかりの毎日を送っていました。

けれども主はこのような私を心にかけてくださり、宣教師を私のもとに導いてくださいました。最初、長老たちは家の玄関を訪れて家族に断われ、一度は帰りましたが、引き返すべきだと感じて今度は私の部屋の方のドアへやって来たのです。そしてキリストの愛について教え、ジョセフ・スミスの「最初の示現」を見せて私を励ましてくださったのでした。

このときから私の生きようと思う気持ちは大きく広がりました。私は長老たちにもらったモルモン経を熱心に読み、とても感心しました。そして1984年12月10日に初めて教会へ行き、それからは安息日には必ず集會に出席しました。バプテスマを受けたのは1985年2月2日でした。主は、病人で何の取り柄もない私をこのように深く愛し、助けてくださいました。主の愛にこたえるためにも、主を愛し、熱心に祈りしようとして強く心に誓いました。

教会員になって2カ月後、私は支部長に「先祖の系図を4代まで探求してください。そして今年の11月には東京神殿に行きましょう」と言われ、まるで夢のようでした。そこで元氣を出して市役所へ行きましたが、そんな古い資料はないと言われました。次に、ある兄弟とそのいとこの方の助けを借りて町外れのお寺へ墓石を調べに行きました。ところが墓石は何年も風雨にさらされて字が見えず、お寺でもそんな古い記録はないと言われ、その年の神殿行きの夢は消えてしまいました。

でも心の中では、夢よもう一度、と

# 7月に召された専任宣教師

第134期生 19人

ローカル



後列左から1-7, 中列左から8-13, 前列左から14-19

| 〈名前〉      | 〈出身地〉      | 〈伝道地〉  |
|-----------|------------|--------|
| 1. 岡田真由子  | 東京西S/多摩W   | 岡山伝道部  |
| 2. 吉嶋佐奈江  | 大阪S/枚方W    | 沖縄伝道部  |
| 3. 鈴木珠美   | 東京東S/鎌谷W   | 神戸伝道部  |
| 4. 小原猛    | 大阪北S/京都洛南W | 沖縄伝道部  |
| 5. 柏山淳    | 大阪北S/高槻W   | 沖縄伝道部  |
| 6. 梅原健志   | 仙台S/石巻D    | 沖縄伝道部  |
| 7. 吉原康裕   | 大阪堺S/三国ヶ丘W | 東京南伝道部 |
| 8. 庄子啓子   | 仙台S/長町W    | 札幌伝道部  |
| 9. 比嘉リナ   | 沖縄那覇S/普天間W | 神戸伝道部  |
| 10. 松尾記代子 | 大阪堺S/三国ヶ丘W | 岡山伝道部  |
| 11. 伊藤智則  | 東京西S/国立W   | 大阪伝道部  |
| 12. 峯岸成和  | 沖縄那覇S/普天間W | 神戸伝道部  |
| 13. 植原洋   | 高崎S/高崎東W   | 沖縄伝道部  |
| 14. 佐々木輝美 | 東京北S/川越W   | 沖縄伝道部  |
| 15. 杉本佳子  | 町田S/町田1W   | 沖縄伝道部  |
| 16. 湯沢淳子  | 仙台S/長町W    | 岡山伝道部  |
| 17. 久保田賢一 | 東京東S/松戸W   | 神戸伝道部  |
| 18. 山崎一三  | 東京北S/浦和W   | 福岡伝道部  |
| 19. 五来貢一  | 東京北S/豊島W   | 名古屋伝道部 |

S: ステーキ部, D: 地方部, W: ワード部, B: 支部

勇気を出して、親戚に電話や手紙で詳しく聞くようにしました。体の方は夏の暑さのために弱っていましたが、私は系図のことばかり考えていました。

そうするうちに、母方の祖母の方は依然としてわかりませんでした。祖父の方は5代まで見つけることができました。父方は残念ながら、4代目の先祖が住んでいた南部藩の出張所が焼けてしまった時、記録も燃えてしまいました。当時を覚えている人もすいません。そのため系図の仕事はなかなか進まないまま、2年目の神殿参入もあきらめていました。

けれどもその年の9月ごろ、伝道部長が来られて「吉田姉妹、あなたは明治生まれですから4代調べるのは無理でしょう。姉妹はこれまでよくやってこられたので、11月に神殿参入してください」と神殿推薦状をくださいました。こうして86歳で神殿参入した、あの時の感激は忘れることはできません。

バプテスマを受けてから4年間で東京神殿に5度、88歳でソルトレーク神殿に教会の兄弟姉妹と共に行った時には4度参入しました。主のおいでになったアメリカ、ジョセフ・スミスの祈った貴い地を訪れたことの感激もさることながら、以前私に福音を教えてくださいました長老にお会いしたり、ペンソン大管長を目の前にしてそのお話を聞いたり、大きな祝福をいただきました。帰国して家に着いた時、主と兄弟姉妹に心から感謝の祈りをいたしました。

これまでの神殿参入で亡き両親のバプテスマと、先立った主人との夫婦の結び固めをしました。私にはこの世の宝はひとつもありませんが、お金で買うことのできない貴い信仰を授けていただきました。これからも私は主の戒めをよく守り、へりくだり、最後までこの信仰を続けて天のお父様に喜んでいただきたいと思っています。長年の病気も癒され、今では毎日楽しくモルモン経をひもといております。私にとって90歳の今は一番幸福な時です。これからも主のみ言葉とみたまの導きに従っていきたいと思います。(よしだ・よね 1900年生まれ)